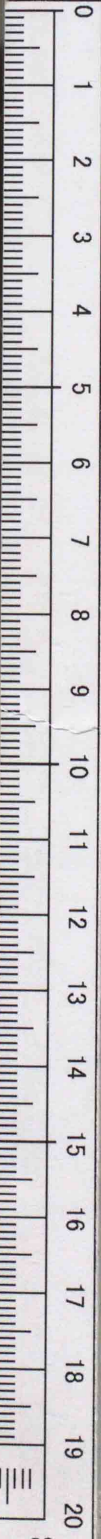


訂改
帝國讀本

卷五

3759
Ha7
資料室



41715

教科書文庫

4
810
41-1918
200036
2052

Kodak Gray Scale

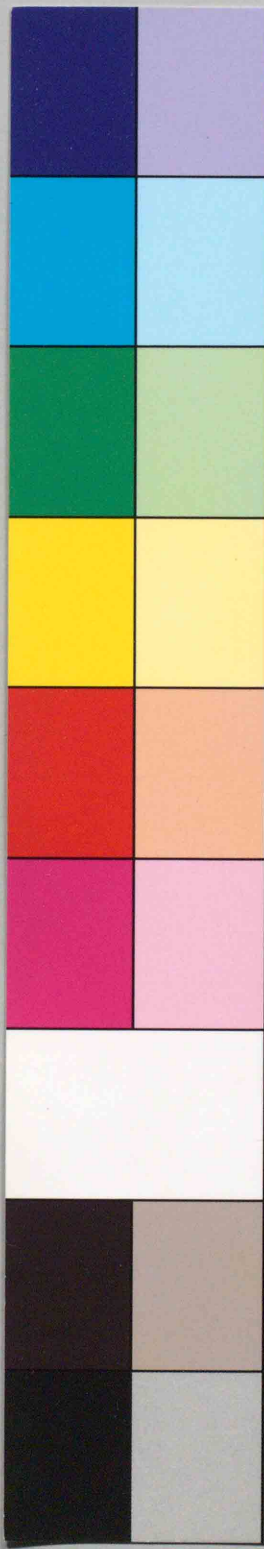
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak



文學博士芳賀矢一編

訂改
帝國讀本



東京
合資
會社
富山房
發兌



訂改
帝國讀本 卷五目次

- 一 文字(口語文)……………一
- 二 大日本國語辭典の序(口語文)……………五
- 三 高山に登りて遠く望む歌(韻文)……………二
- 四 人の脚……………四
- 五 吉野の行宮……………一九
- 六 蒲生君平と小澤蘆庵……………二六
- 七 源九郎義經 其の一……………三三
- 八 源九郎義經 其の二……………三七
- 九 雨の修善寺より(書簡文)……………四〇

目次

一〇	狂歌(韻文).....	四四
一一	平安朝の二大歌人.....	四七
一二	シベリヤ鐵道(口語文).....	五三
一三	長江溯航(書簡文).....	五六
一四	元寇 其の一.....	六五
一五	元寇 其の二.....	六九
一六	戰國武士.....	七四
一七	力(韻文).....	八二
一八	戰爭の精神(口語文).....	八四
一九	夏のさまざま(口語文).....	八九
二〇	大鳴門の眺.....	九三
二一	一撮の鹽.....	一〇一

自讀文

一	書齋.....	一三七
二	吉野の花だより(書簡文).....	一三九
三	運命.....	一四〇
四	舊藩の明君 其の一(口語文).....	一〇四
五	舊藩の明君 其の二(口語文).....	一〇九
六	學習の説.....	一一三
七	阿新丸 其の一.....	一二六
八	阿新丸 其の二.....	一三三
九	月雪花(口語文).....	一二九

四 ハンニバル……………一四七

五 寺と橋……………一五三

卷五 目次終

改訂帝國讀本卷五

一 文字

符牒

文字は言語をしるす符牒である。人の思想が遠い處へも後の世にも傳達せられるのは、全く此の文字のおかげである。

禽獸には完全な言語も無く、もとより文字も無い。人類の言語があつてから、幾千年の後であらう、文明が餘程進んでから、文字といふものが發明せられた。初は狭い仲間で通用してゐたものが、段々と弘く用ひられるやうになつたので



象形文字

あるし、其の文字も時代を逐うて、次第に變化して來たのである。繩を結んで拵へた符牒などは別として、物の形を寫がいて、其の物の符牒とするといふことが、誰でも考へつく。最初の文字であらう。埃及文字の○、D、漢字の○、Dなどが、全く相似て居るのもそれ故である。かういふ文字を象形文字といふ。今日の文明諸國に用ひて居る文字は、皆其の源を象形文字に發して居るので、其の二大源流は、古代文明の榮えた埃及と支那との文字である。

歐米諸國で用ひてゐる羅馬字は、昔羅馬に行はれた文字で、其の数が二十六、これを綴り合せて色々な音をなすことは、諸君のすべて知つて居る通りである。此の外に希臘の國では、今でも昔の希臘字が通用してゐる。

露西亞の文字は三十六字あつて、中には羅馬字と同じの

埃及文字		Phoenicia	
古文漢字		梵字	
希臘文字	<i>Χάνα δε διελ xji</i> <i>Χαράμ για θυγανε.</i>	シテア文字	
羅馬文字	ABCDEFGHIH IJKLMNOP abcdefghijklmno	ペルシヤ文字	
諺文		土耳古文字	

したもの以外ならぬ。フェニキヤ人は埃及の象形文字をば、直

進化

一 文字

音標文字

ちに音を寫す爲に用ひたのである。音を寫す文字、即ち音標文字を拵へたのである。

東洋では支那が最も早く文明に進んだので、支那の文字を輸入して用ひるやうになつた。日本も、朝鮮も、さうである。日本も最初は漢字ばかりで日本語を寫したが、それでは不自由であるから、片假名、平假名を工夫して、便利な音標文字を作つたのである。片假名は漢字の扁旁を省いたもので、平假名は漢字の草體である。朝鮮ではずっと遅く諺文ハルムンといふものを發明した。日韓併合後の今日、諺文はもはや必要が無くなつた。大日本帝國の國民は今日漢字と假名とを併せ學び、併せ用ひて居るのである。

此の外にも昔はアッシリヤ(一)の楔形文字、印度の梵字、又現今

諺文

Assyria.

Judea.
Persia.
Turkey.

(四)文學博士上田
萬年。
(五)東京高等師範
學校教授松井
簡治。

でも猶太(一)、波斯(二)、土耳其古(三)の文字など色々ある。それ等は悉く音標文字である。

二 大日本國語辭典の序

十年一昔といふことを思ふと、上田(四)、松井(五)の二君が國語辭書の編纂に着手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晚餐會に招かれて打興じたのは、つい此の間のやうな氣もするが、其の頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今や其の第一巻がいよいよ出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅

年の流

を禁じ得ないのである。

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに窮りが無い。此の一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や軍事や工業や貿易やの進歩發展の跡を見ても、其の間の十年は通常の十年では無かつた。二君の編纂事業はかういふ中に徐々と其の工程を進めて行つたのである。

工程

鑛山から掘出されて選分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬幾十萬とない古語や新語は、幾百部幾千部の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月二月三月四月、秋も暮れ、春も逝い

Card

(一) 東京市小石川區
駒井口町。

緒に就く

拮据

て、曆も幾度か改る。同じ仕事ははてし無く續く、傍から見れば抄の行かぬことは齒痒い様で、何時方のつくことかと危まれる程であつた。編輯室は松井君の邸内(一)の離れ家にあるが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つた事も幾度か分らぬ。二君の筆と頭腦は間斷無く此の間に活動して、取るものは取り、舍てるものは舍て、其の進捗は遅いが、其の成果は確實であつた。かくて粒々積上げた砂子も遂には山を成す喩のやうに、編纂の稍緒に就いた頃までには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾隻と無く進水式に浮び出たのであつた。

學者の仕事はぢみである。目ざましく世人を驚かすやうなことは無い。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜な一室に

靜に行はれたのである。けれども一たび其の室に入つて山成す材料を見上げるものは、何人も其の難事業たることを承認せずには居られぬ。又編纂者の決心と根氣を尊敬せずには居られぬ。さうしてそれが決して學者の閑事業では無くして、實は國家的大事業であつた事に考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて國民教育の根柢となる國語の調査整理が、現今に緊急であることはいふまでも無い。國家は軍備ばかり進んでも一等國とはいはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に依らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狭い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命があり、學術の意義が

あるのである。十年以前に比べて鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大きい増加したのを祝する人は、之と同時に、數隻の巡洋艦で満足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し歎美しなければならぬ。文物の整備するのは國家の誇であり、飾である。又精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民に取りての立派な強みになる。此の一大産物が堅忍不拔な二君の手に依つて成就せられたことは、友人たる余の言ひしらぬ喜悅を感じずる所以である。此の十年は國語界に於ても、亦無意味な十年では無かつたのである。

學者の事業はいつも世間と没交渉のものでは無い。専心

紛糾

な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、進歩して行く世間を一日も餘所に見て行くわけには行かぬ。十年一昔の間には、國語其のものの中にも絶えず變遷が行はれてゐる。それに注意するだけでも容易な事では無い。靜寂な編輯局は紛糾した實社會と常に相往來して居るのである。

幾多の困難にうち克つて、國民の覺知せぬ間に、其の背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。思ふに後世の人は、必ずこれを明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。

三 高山に登りて遠く望む歌

島崎藤村

高嶺に登り瞥を、

極めて望み眺むれば、

我が行く先の山河は、

目にもほがらに見ゆるかな。

み空を凌ぐ雲の峯、

碎けて遠く青に入る。

こゝしき奇しき巖が根の、

つらなりわたる山をみは、

海にきほへる高潮の、

驚きみだれ涌く如く、

大山祇もゆるぎ出で、
我が魂を奪ふかな。
誰かは誹り誰がうらむ、
つばさをのべし隼は、
空しき天の戸を衝きて、
高きみ空に翔けれども、
打振り打振る羽袖だに、
引止むべき雲も無し。
とほく緑に蔽はれて、
望をつゝむ野の方に、
ひがしに下る川波の、
ゆくへを見れば紫の

山の麓をうち日さし、
滔々として流れ去る。
あゝ大空に風吹けば、
雲おのづから舞ふ如く、
迷の霧にこめられし
くらき谿間を歩み出で、
高嶺に在れば時を得て、
はるかにあがる我が心。
顧すれば越えて來し
山はうしろに陥りて、
荒れにし森の影も無く、
寂しき野邊も見えわかず、

日のてらすとも七重八重、
我が故郷は雲にかくれて。

—藤村詩集—

四 人の脚

大町桂月

青年は走るものなり。壯年は歩くものなり。老年は坐るものなり。人あまりに幼ければ、這ふのみにて歩む能はず。あまりに老ゆれば、腰抜けて起つ能はず。

青年時代は精神の最も熾に發達しつゝある時代なり。進取向上の氣象に富む。記憶力も強ければ想像力も強し。すべての事に進歩が早し。其の精神の活動を譬ふれば、走るなり。人は此の際に於て十分に力量を養成すべし。いはゆる自我發展といふ事は、此の際に最も必要なり。一人前以上の價あ

力量

りて、どこへ出ても引けを取らぬ様に努力して置かざるべからず。走るは可なれども、あせるべからず。あせらば頭が熱して、足元がお留守になるべし。ころぶべし。電信柱にぶつかるともあるべし。溝に落つることもあるべし。

人の身長、體格の發育の止る頃には、人格一通り出來てゐるなり。それより後、精神上の發達が全く止るものなり。發達するも徐々なり。其の精神の活躍を譬ふれば、歩くなり、走るやうには早からず。されど走れば、走ることゝ氣が取られて、左右を見まはすことも出來ず。歩けばゆるく、見物がよくべし。此の際人は分別がつくものなり。腹をこしらへるは實に此の際にあり。自我發展といふことも依然として必要なが、それをあまりに無鐵砲に、金力や權力に向つて求め過

腹をこしらへる

亢龍の悔

ぐれば、恐らくは亢龍の悔あるべし。

上れるだけ上れば、人は坐るの外なし。老人には概して精神上の進歩といふことなし。其の精神の活動の様を譬ふれば坐るなり。人によりては、此の際尊さを増すもあり、一向尊くならぬもあり。尊くならぬは薄つべらの人にして、尊くなるは深みのある人なり。人格も、才智も、徳器も、此の際に全く圓熟す。此の際の自我實現は眞の自我實現なり。銜氣なし、天真流露す。それも人物を磨きて浮世の風波を凌ぎてのことなり。青年時代の自我實現は、銜氣を免れず、空想も加る。自我實現の未成品なり。自我發展は己を磨き上ぐるといふ意に解すれば、いつにても可なり。自我實現は我をむきだしにするの意に解すれば、徳器の成就するまでは考へものなり。

未成品

天真流露

銜氣

徳器

常則

數町の路ならば走らるべし。なほ進んで二三里の路も走らるべし。されど千里を通して走るとは出來ざるべし。歩くは路を行くの常則なり。走るは可なる時もあり、不可なる時もあり。

健脚

意氣銷沈

朝宿屋を出づる時は非常に元氣にて、足の運びも早く、晩宿屋に就く時は意氣銷沈して、びつこ引くやうになるは、これまだ旅なれぬ人なり。健脚家といふべからず。今日は威勢よく十二三里を行くも、明日は弱りて七八里となり、其の明日は更に弱りて五六里となるも、健脚家とはいふべからず。健脚家といふものは、一日歩くに朝も晩も歩行の速度同じなり。今日平氣で十里歩けば、明日も平氣で十里歩き、明後日も平氣で十里歩く。これを學問に應用しても、事業に應用し

ても、いはゞ確かなる人にて、絶えず進歩すべし。

足跡を印す

平地は早く元氣に歩けても、山に登るには忽ちおそくなるものは、平地には慣れても、山路には慣れざる人なり。われ曾て奥州に遊びて、終日路なき山岳を跋渉せしことあり。其の土地にて山男と稱せらるゝ青年健脚の人に案内して、らひたるが、其の人は常に山に登りて、附近數里の山岳其の足跡を印せざる隈もなく、一人にて米と鍋とを持ちて露宿しつゝ、數日間山中を歩きまはることも、少からざる由なり。其の歩きぶりを見るに、平地を行くも、山に登るも、榛莽をおしわけて嶮路を上下するも、谷川を徒渉するも、巖石を飛びつたひゆくも、足の速さに幾ど變りなし。さすがに慣れたるものなりと感服せり。余は山中にては大いに歩き悩みしが、

徒渉
榛莽

達す
窮す

中堅

平地に出づれば余の方早し。其の人笑ひながら、貴下も案外足が弱くは無し。といふ。さきに余が山中にて歩き悩みしを、齒がゆく思ひしなるべし。世を渡るにも、此の人の歩くやうにこそあらまほしけれ。富に處しても、貧に處しても、安逸の境に居りても、千辛萬難にあひても、達しても、窮しても、上に立つても、下に使はれても、病みても、死に臨みても、いつも心に變りの無きは最も信任すべき人にして、又最も尊敬すべき人なり。社會は中堅としてかゝる人を要求す。

——ちび筆——

(一)建武三年五月。

五 吉野の行宮

(一)五月にも成りぬ。

北 畠 親 房

(一)足利尊氏。正平十三年(二〇一八)歿。年五十四。
相語らふ

(二)恒長親王。後醍醐天皇の第六皇子。延元三年(一九九八)薨。年十九。
(三)藤原實世。正平十三年(二〇一八)歿。年五十一。
(四)新田義貞。吉野朝の忠臣。延元三年(一九九八)歿。年三十八。

尊氏等西國の兇徒を相語らひて、かさねて攻上りぬ。官軍利無くして都に歸りまゐる程に、同二十七日復山門に臨幸し給ひけり。八月に至るまでたび／＼合戦ありしかど、官軍進まざりき。

十月十日の頃にや、主上、山門より還幸。いとあさましかりし事どもなれど、なほ行末をおぼしめす道ありしにこそ。東宮は北國に行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣をはじめて、さるべきつはものもあまた仕うまつりけり。

同十二月に忍びて都を出でましまして、河内の國に正成といひしが一族を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ひ、もとの如く在位の儀にてぞましましける。

内侍所

(一)源顯家。吉野朝の忠臣。北畠親房の子。延元三年(一九九八)戦死。年二十一。
(二)義長親王。

(三)和泉國泉北郡。
時や到らざりけん
(四)諸共に皆の下には朽ちずして、うづもれぬ名を見るぞ悲しき。(金葉集、和泉式部)

内侍所も遷らせ給ひ、神璽も御身に隨へ給ひけり。まことに奇特のことにこそありしか。吉野の行幸に先立ちて、義兵を起す輩もありき。臨幸の後には國々にも御志あるたぐひあまた聞えしかど、次の年も暮れぬ。

又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿また親王を先だて申し、かさねて打ちのほりぬ。海道の國々を悉く平げて、伊勢、伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより處々の合戦あまた度、互に勝負ありしに、同五月和泉の國石津といふ處にての戦に、時や到らざりけん、忠孝の道こゝにて極りにき。苔の下にもうづもれぬものとは、たゞ徒らに名をのみぞとゞめし。心うき世にもありしか。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて、しばらく合戦ありし

空しくさへ
なりぬ
いふばかり
無し

(一)源顯信。吉野
朝の忠臣。正
平中戦死。

節度

儲君

かど、朝敵しのびて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退
きぬ。北國なる義貞も、たび／＼召されしかど上りあへず、さ
せること無くて、空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばか
り無し。
さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子また東へ向は
しめ給ふべきさだめあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三
位に叙せられ、陸奥介鎮守將軍を兼ねしめて遣はされぬ。東
國の官軍悉くかの節度に從ふべき由を仰せられぬ。親王は
儲君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ひて、道の程もかた
じけなかるべし。國にてはあらはさせ給へ。となん申されし。
異母の御兄も數多ましましき。同母の御兄も、前東宮恒良親
王、成良親王ましますに、かく定まり給ひぬるも、天命なれば

(一)尾張國知多郡
の篠島。

(二)霞ヶ浦。

めづらか

かたじけなし。七月の末つ方伊勢へ越えさせ給ひて、神宮に
事の由を啓して、御船のよそひし、九月のはじめ纜を解かれ
しに、十日あまりの事にや、上總の地近くより空の氣色おど
ろおどろしく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方
に漂はれたるに、いとゞ波風夥しくなりて、數多の船ゆき方
知らずなりにけるに、皇子の御船のみはさはりなく伊勢の
海に着かせ給ひぬ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけ
り。同じ風のまぎれに、東をさして常陸の國なる内の海に來
着きたる船ありき。方々に漂ひし中に、此の二つの船、同じ風
にて東西に吹分けられぬ。末の世にはめづらかなるためし
にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例無き鄙の御住居
もいかゞと覺えしに、皇大神の止め申させ給ひけるなるべ

こはし

し。後に吉野に入らせましまして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひければ、いとど思ひあはせられて、尊くもありしかな。又常陸はもとより心ざす方なれば、御志ある輩相はからひて、義兵こはくなりぬ。奥州、野州の守も、次の春重ねて下向して、各國に就きにき。

さても八月の十日あまり六日にや、秋霧におかされさせ給ひて、隠れましましてぬとぞ聞えし。寝るがうちなる夢の世、今に始めぬならひとは知りながら、かずく、目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の迹さへとこほりぬ。かねて時をもさとらしめ給ひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第にうつし奉られて、三種の神器を傳へ申されぬ。後の號をば仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す。

(一) 寝るがうちに見るをのみを夢といはんとは、かなき世をもちつゝとは見ず。(古今集、壬生忠岑)

(二) 藤原經忠。正平七年(一一二〇)五月十一日薨。

(一) 應神天皇。

むかし仲哀天皇熊襲を攻めさせたまひし時、行宮にて神去りましましき。されど神功皇后程無く三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて、胎中(一)の天皇の御代に定まりき。此の君聖運ましまし、かば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせたまひぬ。功も無く徳も無きぬすびと世に起りて、四年あまりがほど宸襟を悩まし、御世をすぐさせたまひぬれば、御怨念の末むなしくありなんや。

今の御門また天照大神よりこのかたの正統を受けましましぬれば、此の御光に争ひ奉るものやはあるべき。なかなかかくて静まりぬべき時の運とぞおぼゆる。

— 神皇正統記 —

六 蒲生君平と小澤蘆庵

瀧澤馬琴

(一)志士。下野國宇都宮の人。文化十年(二四七三)歿。年四十六。
(二)京都の歌人。享和元年(二四六一)歿。年七十九。
世にすねたる隱逸

妙手

蒲生君平、山陵探求の爲に京に赴きし時、かの地に絶えて知る人なかりければ、便らん方もなくて困じ果てたり。時に、(二)小澤蘆庵は古學を好み、て萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隱逸なりと聞きしかば、其の助を借らんとて、やがて蘆庵が宿所をおとなふに、そが僕出迎へて、いづこより」と問ふ。伴りて、某は下野なる宇都宮の蒲生伊三郎といふ者なり。琴を好み候へども、田舎にはよき師なし。主人の翁は琴の妙手にておはするよし聞傳へて、はるくと尋ね來つるにて候。といふ。僕は奥に赴きて、これを告げたるに、蘆庵は聲を高くして、あな無益にも訪はるゝものかな。汝出でてしか答へよ。

客を辭し交を絶つ

所望

つばらに

ものから
長者

「主人は久しう客を辭し、交を絶ちたれば、都のうちだにも親しうものせるは稀なり。琴は若かりしとき搔鳴したりけるを、遠近の人に知られて、かれに聽かせよ、これに教へよといはるゝがうるさければ、近頃うち擡きて薪に代へたり。かゝれば所望に従ふべくもあらず。他に求め給へ。」といへ。といふ。君平は、僕が報ずるをも待たず、翁の御答はこゝにもつばらに洩聞えたり。某なほ一言あり。願はくは枉げて聞き給へ。われは實は儒なり。しかくの志願ありて都に上りつれども、相識れる者絶えてなし。翁の古學を好み給ふと、其の氣質の俗ならぬとはかねて傳へ聞きしものから、いひよる由のなきまゝに、琴を學ばんとて來つ。とはいひしなり。こは長者を欺くに似たれども、其の虚言は已むことを得ざるより出で

他事もなく

たるなり。今一度わ殿を勞せん。此の由取次ぎ給へ。」といふ。蘆庵もこれをもれ聞きて、さりとは思ひかけざりき。そは珍しき客人なり。對面せずば悔しきこともあらん。こなたへと申せ。とて、やがて面を會せけり。君平深く歡びて、事の趣つばらに語り出づるに、蘆庵ひたすら感歎して、足下は得がたき學士なり。さる志ならんには、我が庵に杖をとめて、こゝらあたりの陵を靜に探求し給へ。」とて、また他事もなくもてなしけり。

ともすれば

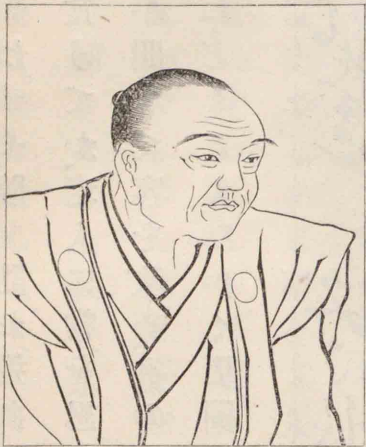
これより君平は日毎に陵を訪ねめぐるに、ともすれば日暮れて歸るを、主人はいつもみづから風呂を焚きて、入浴せさするを例とせり。君平其の心づかひを心苦しとて辭みたれど、「これらの事は、ひたすらに客を愛するのみならず、足下

更闌く



平 君 生 蒲

思ひ掛む



庵 蘆 澤 小

の如き國の爲に力を盡す人の疲勞を、聊かなりとも打慰めん
の心のみ。必ず辭み給ふな。とて
聽入れず。かゝりし程に、君平は
ある夜更闌けて、子二つの頃歸
れるに、蘆庵はいまだいねず、例
の如く入浴せさせ、飯をすゝめ、
さていふやう、われ足下を宿せ
る日より、蔬菜の外に物もなく、
させるもてなしをばせざれど
も、老僕は憇はせんとして、手づか
ら風呂をさへ焚くを思ひ掛み

道草食ふ

非を飾る

池邊紅葉
みさびあて池
こそあらねい
にしへの秋を
うつせる岸の
もみぢ葉蘆庵

(一)臨濟宗。山城
國葛野郡衣笠
山の麓。

うらみ心頭
に起る

梟臣

建武中興

給はずや。陵を訪ね巡ればとて、今までは用なからんに、道草食うてか、老人に物を思はせ給ふこと心得がたし。と呟く。君平聞きて容を改め、翁のうらみ理なり。我が非を飾るにあらねども、こよひかく更闌けたるはいさゝか故あり。懺悔のた

池邊紅葉
みさびあて池
こそあらねい
にしへの秋を
うつせる岸の
もみぢ葉蘆庵

蹟筆蘆庵澤小
(藏氏之由野萩)

め笑に供へん。今日は某の天皇の陵を訪ねたりしに、日暮るるまでたづねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて、年頃のうらみ心頭に起りて堪へられず、墓に向つて罵るやう、「梟臣尊氏、靈あらば今いふことをたしかに聞け。汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して、逆に取

逆に取り
逆に守る
干戈をさま
らす

うまいやし
けん

(一)京都洛東粟田
の南。
(二)秀吉の姻戚。
木下勝俊。慶
安二年(二三
〇九)歿。年八
十一。

り逆に守り、毒を後世に流しゝより二百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もために焼失せ、王室もこれによりて衰へ、歴代帝王の山陵すらもあとなくなりて、われらにさへ飽くまで物を思はするは、皆これ汝が罪なり。天罰思ひ知るべし。』とて、杖をもて石塔を思ふがまゝにうち敲きぬ。かくて寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道の邊の酒屋にたちより、怒に任せて飲みし程に、六七合をつくしたりき。さて酒屋をば出でしかど、酔ひて足も定まらず。此の儘にて歸らば必ず翁に叱られん、半ば醒して行かんと株に尻をかけしより、うまいやしけん、驚き覺むればはや更闌けたり。と語るに、蘆庵は呵々とうち笑ひ、さても世には似たる馬鹿者もあるものかな。我も去にし年、或日靈山の邊に逍遙して長嘯子の墓所

行きもえや
不滅の罪

鬼胎を懐く
(一)徳川氏の臣。慶長五年(一六〇〇)伏見城を守つて戦死す。年六十
一盲衆盲を引く

を過ぎし時、行きもえやらずにらまへて、「長嘯子、不滅の罪あり。わぬし自らこれを知るか。わぬしは豊太閤の外族として位高く、采地も廣かるに、心さま武士に似ず。伏見の籠城に、敵の旗色に鬼胎を懐きて鳥居元忠等を棄殺にし、かつ事平ぎて後罪を蒙り、纔かに命を助けられしを幸にして、耻を知らず、心にもあらぬ世捨人顔して、えせ歌多く詠じたる。一盲衆盲を引きしより、歌の調のわろくなりて、今に至るまで直らぬは、これ不滅の罪にあらずや。冥罰かくの如くならん。」と罵りながら、杖を擧げて墓を殴ちたることありけり。こはよく似たるにあらずや。」と語りもあへず、聞きも終へず、齊しく腹を抱へたり。

— 兔園小説 —

七 源九郎義經 其の一

辨慶の太刀取

(一)武藏坊辨慶。

辨慶^(一)思ひけるは、人の重寶は千そろへて持つとぞ聞く。奥州の秀衡は名馬千疋、鎧千領、松浦の大夫は胡籙^{やまぐさ}千腰、弓千張、かやうに重寶を描へて持つなり。いで夜に入りて京中に佇み、人の佩きたる太刀千振取つて我が重寶にせんと、夜な夜な人の太刀を奪ひ取りぬ。しばしこそありけれ、當時洛中に長一丈ばかりある天狗法師ありて、人の太刀を取る。」とぞ申しける。

しばしこそありけれ

利生

かくて今年も暮れけるが、次の年の五月末、六月の初までに、九百九十九腰こそ取つたりけれ。六月十七日、五條の天神に参りて、今夜の御利生に、よからん太刀を與へてたび給へ。」

夜と共に祈念す

と夜と共に祈念し、既に夜も更けぬれば天神の御前を出で、南へ向つて行く。人の家の築地の際に佇みて、天神へまゐる人のなかに、あつばれよき太刀持ちたる人をぞ待ち居たる。

さ夜ふけて

曉方に近く、堀河を下りに行くに、面白き笛の音こそ聞えけれ。辨慶之を聞きて、面白や、さ夜ふけて天神へ参る人の笛吹くは、法師やらん、男やらん。よからん太刀を持ちたらば取らんと思ひ、笛の音の近づくまゝに、さしく々みて見れば、未だ若き人の、白き直垂ひたれに胸板を白くしたる腹巻に、金かね作りの太刀の心も及ばぬを佩かれたり。辨慶之を見て、あはれ太刀や、何ともあれ、取らんずるものと思ひて待ちぬ。

何ともあれ
御曹司(一)源義經。

御曹司其の時木の下に、けしからぬ法師の、太刀わきばさ

左右なく

みて立ちたるを見給ひて、彼奴はたゞ者ならず、此の比都に人の太刀を奪ひ取る者ならんと、少しもひるまずかゝり給ふ。辨慶現れ出でて、只今しづまりて敵を待つ所に、けしからぬ人の物の具して通り給ふこそ怪しく存じ候へ。左右なくえこそ通すまじけれ。さらば其の太刀をなたへ給はりて通られ候へ。と申しければ、御曹司之を聞き給ひて、此の程さをこの者ありとは聞及びたり。左右なく得こそ取らずまじけれ。ほしくばよりて取れ。とぞ仰せられける。さて見参に参らん。とて太刀を抜いて飛んでかゝる。御曹司も小太刀を抜いて、築地のもとに走り寄り給ふ。武藏坊之を見て、鬼神ともいへ、當時我を相手にすべき者こそ覚えねとて、もつて開いて丁と打つ。御曹司、彼奴はけなげ者か、なとて、電の如くに

をこの者
見参に参らん

けなげ者

弓手ゆんでの脇へつと入り給へば、うち開く太刀にて、築地の腹に切先打立て、抜かんとしける隙に、御曹司走り寄りて、左手の足を差出して、辨慶が胸をしたゝかに踏み給へば、持ちたる太刀をからりと捨てたるを取つて、えいやといふ聲のうち、九尺許ありける築地にゆらりと飛上り給ふ。辨慶胸いたく踏まれぬ。鬼神に太刀とられたる心地して、呆れてぞ立ちたりける。

狼藉

御邊

御曹司、是より後にかゝる狼藉すな。太刀を取りて行かんと思へど、ほしさに取りたりと思はんずる程に、取らするぞ。とて、築地のおほひに押しあて、踏みゆがめてぞ投げかけ給ふ。辨慶太刀取つて押直し、御曹司の方をつらげに見やりて、念なく御邊はせられて候ものかな。常に此の邊におはする人と見るぞ。今宵こそ仕損ずとも、是より後に於ては心ゆるすまじき物を。とつぶやきくぞ行きける。

八 源九郎義經 其の二

浮島原の對面

佐殿は善悪に騒がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外嬉しげにて、さらばこれへおはしまし候へ。見參せん。と宣へば、彌太郎やがて參り、御曹司に此の由を申す。御曹司大きに悦び、急ぎ參り給ふ。佐殿つくづくと之を御覽じて、まづ涙に咽び給へば、御曹司も共に聲を吞みて泣き給ふ。

互に心のゆくほど泣きて後、佐殿涙をおさへて、さても頭の殿におくれ奉りて、其の後御ゆくへを承り候はず、幼少に

聲を吞みて泣く
(一)父左馬頭源義朝。

(一)平清盛の繼母。
(二)蛭ヶ小島。

おはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東、北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向の由はかすかに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと御忘れ候はで、取敢へず御上り候こと、申し盡しがたく悦び入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企て候へ。八箇國の人々を始として候へども、皆他人なれば身の一大事を申しあはする人もなし。平家の討手上せばやと思へども、身は一
人なり、頼朝自身進み候へば、東國おほつかなし。代官を上せんとすれば、心やすき兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひ難かりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭

(一)源義家。

(二)源義光。

魚と水との如し

ごかくの返事

大名小名

形の如く

殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。吾等が先祖八幡殿の後三年の合戦に、舍弟刑部丞と一つになりて、遂に奥州を従へ給ひける時の御心も、頼朝が只今の心にかかまざるべき。今日より後は魚と水との如くにして、先祖の耻をすゝぎ、亡魂の憤を息めん。と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの返事もなくして、袂をぞしぼられける。これを見て大名、小名互の御心おしはかりて、皆袖をぞぬらしける。

しばらくありて御曹司申されけるは、仰の如く、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらん、配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ参りて、十六まで形の如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便をつく

るよし承り候間、奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御旗揚の由承りて、取敢へず馳參る。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御見參に入り候こゝちしてこそ候へ。身をば君に進らす上は、いかが仰に従ひ參らせでは候べき。」と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそ哀なれ。さてこそ此の御曹司を大將軍にて上せ給ひけれ。

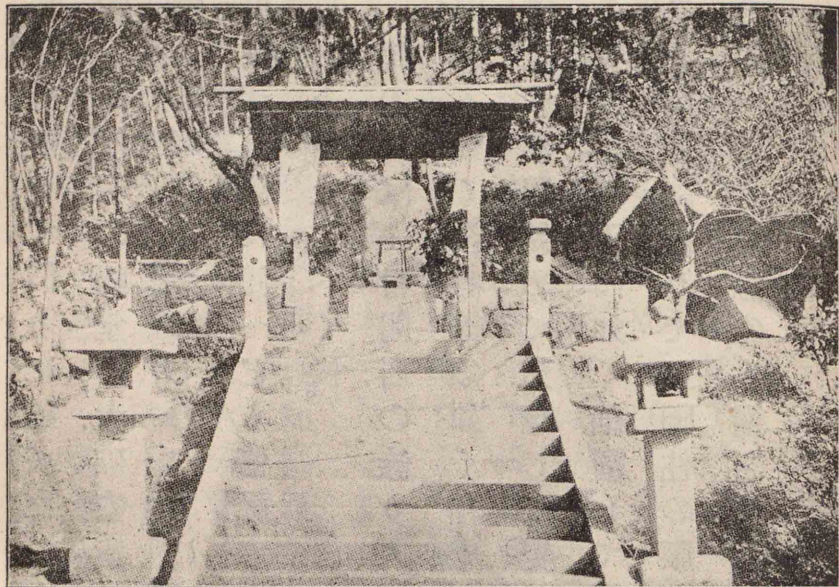
—義經記—

九 雨の修善寺より

尾崎紅葉

(一)桂川。

再啓。昨日は雨の日暮し無聊に困しみ、夕景始めて傘さして、川向の小山なる頼家公の墓を拜し申候。時政爺の邪慳何ぞ今に執着して假さゞることかくの如きか。」と、見るもいたはしの荒涼たる藪蔭に空しく一片の殘石を留めて、慘禍を



源頼家の墓

生前に極め、耻辱を末代にさらされ候事、御身一たびは征夷大將軍の顯榮にもほり給ひつる御運にして、如何なる前世の御宿業にかおはしけん、と、低回去るに忍びかね候。

墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり。これこそ公の奥津城にして、現在の五輪塔は、後人の御墳

(一)源範頼。

無きを慨きて假りに建てたるものなりとの考證これあり候。されば右の經堂の大破、安置せる丈六佛の朽廢、亦決して懷古の暗涙を斂めしむべきにあらず候。^(一)蒲冠者の墳は未だ弔はず、直隣に候へども修禪寺にも參詣致さず候。追つて一見の上申上ぐべく候。

此の日は一日閉居の餘り入浴七度に及び、剩へ連夜の按摩頗る勁く、全身綿の如く相成り、疲勞度に過ぎて終夜眠る能はず、黎明始めて交睫して、覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣玲瓏玉の如く、踊躍して獨鈷の湯の撮影を試みんと逸り候程に、過りて三脚柱の腰部をへしをり、尠からず當惑致候へども、應急の手術を施し、やをら湯の上流の淺瀬に蹈入り、ピント合せ候が、ひまどり候程に、水中の赤脚寒に堪へ

黎明
交睫

ず、而も來浴者頻々として、然るべからざる處に布などを翻し、或は目障の邊に着物を脱ぎはなしなど、始終ピント安を妨害致候爲、技師の難澁これに過ぎず候ひき。辛うじて一照致候へども、印畫の安否甚だ心許無く存候。

それより去りて川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる坂道の中段に機械を立て候處、崖下なる馬の湯に上下する四足の往來ありて、屢、これに道を讓るべく餘儀無くせられ候ため、倥偬の間に速寫機を拵りて立退き申候。

此の寫眞修行の前、人の需によりて少々龜筆を揮ひ申候。然るに僻境の惡箋用ふべからずなど不足を申候處、亭主の才覺、紙門に貼りのこしの地紙裁ちて持來り候に、居然たる檀紙、金砂子の好短冊を得候こそ風流此の上無く、感心致候

居然

へ。
 二日の雨にて椎茸出来候へば、味淋醬油の附焼に致候。今は春子のすがれにて、肉薄く、氣も亦微には候へども、山厨の佳味侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは、箸を同じうして論ずべきにあらず候。
 本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆、草餅を貰ひ、夜に入りて友人より新杵の一折を贈られ候。
 胃病の人、毎に餓鬼の如し。幸に食談の煩を咎め給ふなかれ。草々不盡。

一〇 狂歌

鯛屋貞柳

(一)大阪の人。本名榎並善八。油煙齋と號す。享保廿年(一八三九)歿。

果報

ふじの山夢に見るこそ果報なれ
 路銀もいらす草臥もせず

四方赤良

(一)幕臣。本名大田。南歌又蜀山人と號す。文政六年(一八二四)歿。

さわらびが握り拳を振上げて
 山の横つらはる風ぞ吹く
 ほととぎす啼きつるあとに呆れたる

後徳大寺のありあけのかほ

宿屋飯盛

(二)江戸の人。本名石川雅望。天明元年(一八一一)歿。

歌よみは下手こそよけれ天地の
 うごき出してはたまるものかは

朱樂菅江

(三)江戸幕臣。本名山崎景貫。寛政十二年(一八〇〇)歿。

あまのはら月すむ秋をま二つに

(一) 江戸の人。本名北川嘉兵衛。狂歌堂と號す。文政八年(一八二七)歿。年七十八。

(二) 江戸の人。田安家の士。本名小島源之助。享和二年(一八一四)歿。年六十。

(三) 江戸の儒者。本名立松東蒙。寛政元年(一四九九)歿。年六十四。

(四) 京都清水寺。

(五) 江戸の人。本名岸宇右衛門。寛政八年(一四五六)歿。年七十。

ふりわけ見ればちやうど仲磨

鹿津部眞顔^(一)

あらそはぬ風の柳の絲にこそ

勘忍ぶくる縫ふべかりけれ

唐衣橋洲^(二)

菜もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋のゆふぐれ

平秩東作^(三)

ゆく春を思ひきれとや舞臺から

飛んで見せたる清水のはな

つむり光^(四)

ほとゝぎす自由自在にきく里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

木端^(一)

世の中を何のへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

一一 平安朝の二大歌人

尾崎雅嘉

一 紀貫之

紀貫之延喜年中勅に依つて、從弟の友則、其の外凡河内躬恒、壬生忠岑と共に古今和歌集二十卷を撰せられし時、其の序を作られたり。すべて其の頃までの作文は、みな漢文の體をうつしたるものにて、假名にて文を書くことは貫之に始

(一) 江戸の狂歌師。

りぬ。

いつの時にかありけん、貫之紀伊國に行きて、都にかへり上らるゝに、夜中に和泉の國を通られけるが、俄に乗りたる馬、足を折りて進み行かざる所ありければ、不審に思はれたるに、道行く人のいふ、「これは此の所にいます神の所爲なり。年頃社も無くて知れる人もあらねど、いとうたてく咎めたまふ神なり。」と申しければ、貫之直ちに馬よりおり立ちて、旅中の事ゆゑ神に捧ぐべき幣帛も無ければ、たゞ手を洗ひ膝まづきて、神のいますげも無き山に向ひて、「そもく、何の神とか申す。」と問へば、「蟻通の神となん申候。」といふに、

搔曇りあやめも知らぬおほ空に

ありとほしをば思ふべきかは

いとうたて

と詠まれければ、かの馬忽ちに起上りて、常よりも優れる駿足となれりとぞ。此の歌の心は、かやうに搔曇りて、何のあやも知れぬ大空に、星あらんとは思ひかけざりつといふにて、蟻通しを有りと星といふ言葉に隠して詠まれたるなり。

後に天慶九年貫之病を獲て癒えがたく思はれける時、源公忠に歌を寄せて曰く、

手におすぶ水にやどれる月かげの

あるかなきかの世にこそありけれ

かくて程無く身まかられぬ。

二 藤原俊成

俊成卿若かりし時、母方の祖父藤原顯隆の養子となりて名を顯廣といひしが、後に俊成と改名せられぬ。和歌は基俊

(一)藤原基俊。平安朝末崇徳天皇時代の歌人。

(一)藤原俊賴。基俊と同時代の歌人。金葉集の撰者。

を師として、古今集の傳もかの人より受けられき。其の頃基俊と俊賴(一)と兩人ながら世に名高き歌よみなりけれど、仲悪しくて、其の弟子どもかたどりに流義を立て、誹りあへり。俊成卿もとより基俊の弟子にてありけれど、一途に基俊のことをのみは譽められず、俊賴に於ては其の歌の風體よきことを譽め、基俊に於ては其の學力の長じたることを譽められけり。

俊成卿自讚の歌のことは、俊惠法師の物語に曰く、五條三位俊成の御許にまうでたりしついでに、『御詠の中にはいづれをかすぐれたりと思す。』と申せしに、俊成卿、夕されば野邊の秋風身にしみて、うづら鳴くなり深草のさと

これをなん身に取りてのおもて歌とは思ふなり。』といはれしかば、俊惠『世にあまねく人の申すには、

面影に花のすがたをさき立て、

いくへ越え來ぬ峰のしら雲

これを秀れたる御歌のやうに申すはいかゞ。』と申しければ、俊成卿『いさよそにはさもや定めん。尙自らはさきに申せし歌には言ひくらぶべからず。』とぞ言はれける。』と。

又俊成卿つねに歌よまるゝ時は、古き淨衣を着て正しく坐し、桐火桶を抱きながら、心を凝らしてよまるゝことにて、聊かもくつろぎたる姿をせられざりしが、歌の出で來たる様何と無く心正しくして、其の言葉やはらかに調ひければ、世の人桐火桶の體すがたといへり。

此の卿老後に至りても、耳目ともに衰へず健かなりければ、禁裏の御會にも度々參られぬ。後鳥羽院の御師範にて御寵愛ふかゝりけるが、建仁三年此の卿九十歳なりければ、光孝天皇遍昭に賀を賜ひし例に倣はせられ、禁中の和歌所にて九十の賀を賜はり、屏風、褥なども設けさせ、御製の歌と鳩の杖とを賜はりければ、子息たち俊成卿をたすけて殿上に上られしとぞ。

—百人一首一夕話—

一一一 シベリヤ鐵道

堵をなす
物々し
殺氣充つ

大戦亂中の露都、革命後の露都、前王宮を始め、各所の公共建造物に翻る赤旗、麵包賣る家の前に堵をなす男女の列、銃劔物々しい辻々の衛兵など、見る物毎に何と無く殺氣が充

一、大正六年。

Siberia

満ちて慘澹たる中を、今日は五月八日の火曜日、一週一回のシベリヤ急行列車が出るので、午後七時、七時といつても、日暮まではまだ三時間もある日盛り、馬車を驅つて停車場へ急ぐ。照る日のまばゆい中から小さい雪片がちら／＼する。停車場の混雑は一方で無いが、七時五十分の定刻に、一分違へず出發する。

特別廣軌の露西亞鐵道、さすがに乘心地はよい。沿道すべて廣々とした廣原、見渡す限り矮小なひばの木、白樺で、處々に貧しい村落がある。各停車場には夥しい材木が積んである。此のあたりの主要な産物であらう。

九日の朝ウオログダといふ驛にとまる。こゝは鐵道の大工場のある所とか、寒さうに頬被をした田舎娘が麵包や卵を

Vologda

賣りに来る。僅か一夜路の都では、食物の大缺乏であるのに、こゝはまた案外に豊富な有様、乗客が我も〜とカバンの様を大きな麵包を買求めるのも面白い。急行といひながら、處々の驛で十分、二十分、乃至一時間の停車、これは戦時輸送の爲であらう。十日にはカマ川を渡つて(一)ペルム停車場に着く。乗降客は可なりに多い。沿道の楊樹は已に青ばんで居る。翌朝目が覺めると、已にウラル山中である。音に聞いたウラル大山脈とも覺えず、唯森林が稍稠密で、大きい樹が多い。十時過エカテリンブルクに下車して、種々の寶石などを購ふ。一々秤にかけて直段を極めるので、悠々たるものである。草(二)緑に山青く、温暖いよ〜加る。

(三)イルチッシ川を渡つてオムスクに入つたのは、次の日の正

(一)Kama
(二)Perm.

(三)Vral.

(四)Ekaferinburg.

(五)Irish.
(六)Omsk.

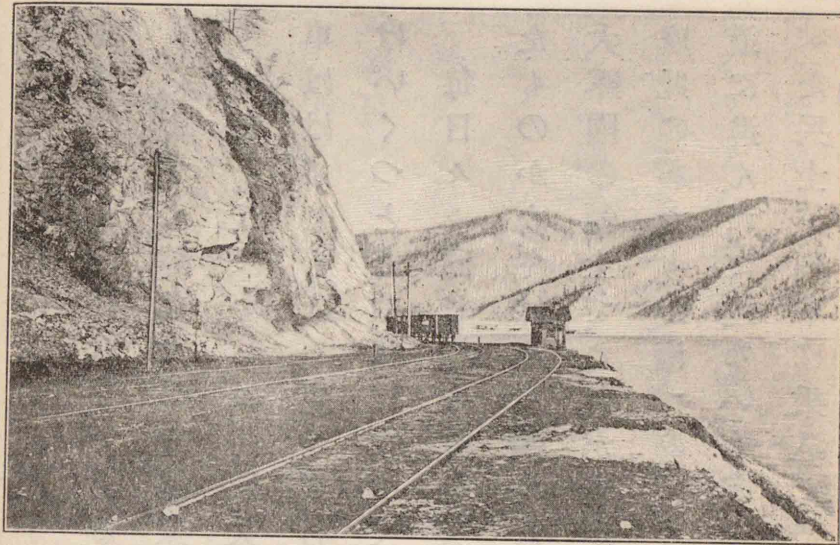
午頃である。緑の林が全市を掩ひ、二三の高塔も聳えて、繪葉書其のまゝの好風景である。そよ〜と吹く風も春めいて、あくまでも靜な太平な氣象、毫末も戦時の面影は無い。ウラル山を下つてからは、一望又々平野、單調な眞直な軌道を、汽車ははてしもなく走つて行く。同一の構造、同じ様な停車場はいくつとなく後になつて行く。

毎日々々同じ様な景色、天はむやみに大きな陸地を造つたものかな。冬は氷に鎖されるこんな大廣原、これが現在の露國の領土で、これが昔からの遊牧諸民族のうろついた處。此のあたりが海であつたなら、世界の歴史は全く別な筋道に進んだに違ないなどと考へる。鐵橋通過の時は、銃劍携へた兵士が列車に乗込んで、各客室の入口に見張る。誠に嚴

遊牧

氣分を味ふ

Ilankut.
Ilankut.



道鐵の近附湖ルカイバ

重な警戒である。こゝに少し
戦時の氣分を味ふと、或停車
場では、若い婦人が公衆に對
して演説を試みて居る。人に
聞けば、土地分配と婦人の參
政問題を論じて居るとやら、
こゝまでも革命の思想は漲
つて來て居るのである。イル
クット川を渡つてイルクツ
クに着く。今日は十四日の火
曜日、はや一週間は過ぎた。此
の地には日本人も二三百人

Ilankut.
Ilankut.
風光雄偉

Ilankut.
Ilankut.

は移住して居るといふ。停車場の食堂は、急いで食事をす
人で大混雑である。こゝから一時間でバイカル驛、アンガラ
川が湖水から流れ出る所、山も水も風光は雄偉である。惜し
いかな、夜に入つて湖水の眺を恣にする事が出来なかつた。
イルクツク以東は戦時輸送の影響も少いのか、汽車の進
行は非常に抄取つた。名も知れぬ草花が、白、黄、紫、平野一面を
蓋うて居る。驛々には花賣る子供が集つて來る。穢いながら
赤、萌葱、青などの色彩鮮な服装をした土地の婦人が、汽車を
眺めて佇んで居るのは、露都の人類學博物館で見たものを
今は實物で見るのである。

急行列車が二十四時間後れて、十一日目の朝十一時半滿
洲里に着いた。こゝから東清鐵道が始るのである。滿洲里と

漢字で書いたのも珍しかつたが、四邊の風物も何となく東洋的である。停車場にうよ／＼とうるついで居る支那人の小さななさ、これが共和國の國民かとあきれざるを得ぬ。日本人會の某氏が出迎へられて、酒食を送られたのは、何よりもうれしかつた。

一三 長江湖航

徳 富 蘇 峯

予は今朝長沙(一)を去りて、漢口(二)に歸航する湖南汽船會社所有船湘江丸の客船中にあり。船は既に湘江(三)を出でて洞庭湖(四)に入れり。風あり、波あり、時に雨あり、冷氣秋の如し。乃ち小閑を得て、長江湖航を略報致すべく候。
七月九日夜九時、上海(五)に於て大阪商船の大吉丸に乗込み

(一)支那湖南省の首府。開港場。
(二)支那湖北省漢陽府に屬す。
(三)支那廣西省の東沙を經て洞庭湖に入る。
(四)支那湖北省第一の大湖。
(五)揚子江のこの長流。世界第四の揚子江の河口。東洋第一の貿易場。

極目際なし

一霎

指顧の間に在り

候。九日の夜といはんか、十日の曉といはんか、我が大吉丸は既に長江の本流に入れり。江といはんか、海といはんか、極目際なし、唯茫々として月影の江心に涌くあるのみ。快眠一霎後、甲板に出づれば、兩岸の風色、我が精銳なる雙眼鏡の力を借りて、始めて仔細を辨ず可し。叢生したる蘆葦は定めて北支の高梁と其の長を競ふ可く、柳蔭の民舎は概ね蘆葦を以て葺けるが如し。水邊に眠る水牛、水草の裏に魚を撈る漁夫、河童の如く堤外の小流に出没する兒童、而して往來織るが如き小帆、大帆、悉く指顧の間に在り。然も長江の大には何といふとも平身低頭せざるを得ず候。此の邊は四十清里の河幅に候由、其の大きさ加減御察しこれあるべく候。即今揚子江は増水すること四十尺以上と聞及び候。正にこれ長江最

大膨脹の季節に候。

船中無事、唯長江圖説によりて其の地理を察し、其の雄偉壯大なる光景に應接すると、然らざれば籐椅子によりて江上の涼風を満面に受けつゝ、晝寝を貪るあるのみに候。

渺々^{スル}奔波^{ナリ}與岸平。

半江雷雨半江晴。

布帆多在柳梢上。

掠水沙禽不識名。

これは全くの實景に候。一字の虚構なし。夕立の空よりひろき武蔵野の原と太田道灌が詠じたる歌も、今更思ひ出され申候。たゞ「與岸平」と申せども、時としては岸上に溢れ申候漢口平水五十尺と申せば、今日にては九十尺なり。一萬五千噸の戦鬪艦の六百哩の上に溯るも、決して不思議にこれ無く候。

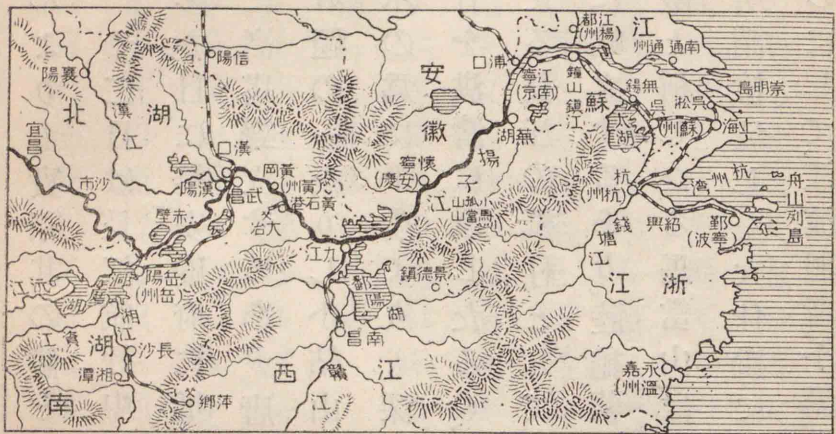
(一)露おかぬ方
立の、空より夕
廣き武蔵野の
原。

(一)王安石、宋の
政治家、文學
者。一六八一
一七四六
江雲模糊

(二)安徽省にある
條約港。

(三)元代の有名な
小説。

肯綮に中る



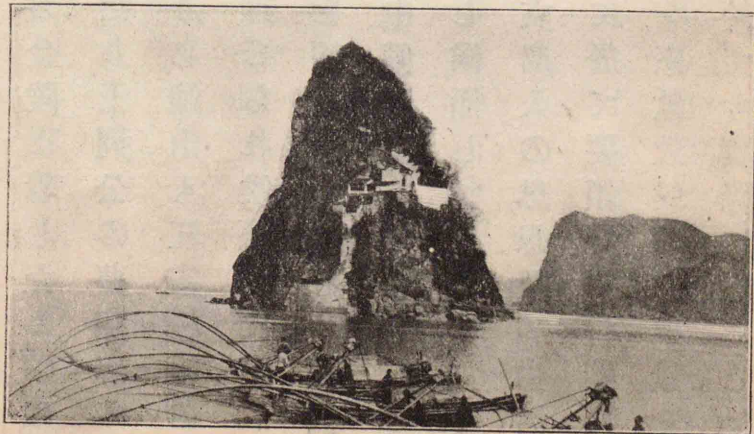
十一日は長江の雨景を眺め候。南京即ち金陵に着したる頃は江雨霏々たり王荆公の夢寐忘るゝ能はざりし鐘山も、江雲模糊の裏に半ば封ぜられ候。蕪湖に至れば大雨盆を傾くるが如し、所在無ければ、船中備附の水滸傳を讀みて閑を消し候。而して今更の如く、水滸傳が支那人の思想及び生活を叙するに於て要領を得、肯綮に中りたるを感歎致候。即ち風景を記するに於ても、實際に近しといは

(一)安徽省の首府。

(二)唐の文人。
(三)肥後國八代郡の山中に發し八代港に注ぐ。

んよりも、實際其の儘と存候。

十二日は長江航行中最も獲物多き日に候。(一)安慶府に抵れば、江畔に高塔聳立するあり。唐宋詩人の好題の一たりし小姑山は、縦令増水の爲に平生よりも深く其の腰骨を洪濤に没したるも、なほ滾々たる長江の柢柱として、其の中心に屹立するあり。陸龜蒙が天下の險と稱したる馬當山は、球磨川の所謂槍流しを大仕掛にしたるものにして、江流廻環、小渦、大渦、大大渦其の下に千轉萬合しつ



小姑山

毛髪を豎てしむ。

(一)湖北省武昌の東南に在る一縣。

(二)湖北省の首府。

(三)湖北省にあり。

鼎立 雄鎮

一議に及ばず渡りに舟

つある、人をして爲に毛髪を豎てしめ候。

十三日は大冶の鐵山を遙見し、薄暮漢口に着し候。漢口は武昌府と江を隔て、相對し、恰も馬關と門司との如し。更に漢水の來會する頭に漢陽あり、鼎立の姿をなし、洵に南支の雄鎮に候。着船と同時に湖南汽船會社の木幡氏來船し、同夜直ちに同社の湘南丸が長沙に向けて發航するにつき同行すべきやとの誘引あり、一議に及ばず、渡りに舟の心地にて、直ちに乗移り申候。

十四日、目覺むれば身は湘南丸の上にありて、漢口上流の揚子江を溯りつゝあり。此の邊、江口より六百餘哩の上なれども、江の幅はなほ一哩以上或は二哩にも及ぶ可く、江水は依然森茫たり。江岸には隨處に水牛群をなし、兒童の水牛を

宛然

驅使するや、狗兒を扱ふよりも容易なるが如し。耕作には固よりこれを使用いたし居候。其の江畔の柳蔭に兒童が牛背に腰を掛けて悠然たるさまは、宛然一幅の畫に候。而して増水の痕跡は隨處にあり。根こぎの柳樹など到る處に倒れ居候。

碧愈碧

十五日、起ちて江水を見れば既に碧なり。乃ち船の洞庭湖に入りたるを知る。九日以來赤味噌汁の如き江水の中に生活したる此の身に取りては、如何にあり難かりしよ。直ちに洞庭湖水の水風呂に浴し、心身爽快に相成り申候。湘江に入れば碧愈碧江流も漸く縮まりて、始めて河らしく感じ候。

申す迄もなく、洞庭湖の見物は、大筏に候。一箇の筏の上に

は十數軒の家あり、豚も飼へば鶏も養ふ。時としては野菜畑さへこれ有り、遠く望めば一村落の如し。然り一村落が筏となりて洞庭を過ぎ、漢口を経て蕪湖に達し、此處にて豚、鶏等悉皆賣捌く由に候。

—七十八日遊記—

一四 元 寇

其の一

三 宅 雪 嶺

白露戰役の酣なりし時、朝廷は北條時宗に從一位を追贈せさせ給ひぬ。

呑噬

(一)北條第六代の
執權。弘安七
年(一九四四)
歿。年三十四。

好を通ず

惟ふに元は國を滅すこと四十有餘、能く其の呑噬を免れたるものあらざりき。しかも我一たび之と干戈を交ふるや、之を撃破してまた近海に出没すること能はざらしめぬ。元、使者を遣はして好を通ずるを求め、時宗斷乎として之を拒

戰端開かる

めり。かくて戰端はこゝに開かれたり。此に就きて自ら三箇の疑問の出づるあり。其の一、拒絶は果して時宗の意志に出でしか。其の二、拒絶は果して道理を具へしか。其の三、拒絶は果して得策なりしか。事の跡に就きて稽ふるに、拒絶は時宗一人の志よりせしにあらず。當時彼を輔佐せし多くの人の與り關せし所にして、寧ろ國是の然らしめし所と謂ふべきのみ。初め元の我に使者を遣はしたるは、實に文永五年にてありき。時宗年甫めて十八、余は其の拒絶の獨斷ならざりしを信ず。爾後元使の相踵いで到るもの數次、十三年を経て弘安四年に至り、終に大舉して入寇す。時に時宗意氣正に旺盛、恐らくは斷乎たる決心を以て事に臨みしならん。故に一戰して元兵を鑿にしたる、時宗與りて功ありとす。唯十三年間

國是

(一)龜山天皇の御代。弘安四年を去る十三年前。

(二)後宇多天皇の御代。

同一の方針なりしは、國論の之を致し、ものとすべし。

恩威並び具る

元の好を通ぜん事を求め、而して我の之を拒絶せしは稍穩かならざるに似たれども、彼の國書を閱するに、實に我に於て拒絶するの已むべからざりしを知るべし。其の書や文辭堂々、恩威並び具る。彼必ず以て我を心服せしむるに足ると爲し、ならんも、顧て我が日本の歴史より察すれば、全然拒絶するの外、他に採るべき策あらず。其の間を通じ好を結び、以て相親睦せん。といへる、辭として難すべきものなければ、我を待つに屬國を以てし、高麗と同一視する態あるは、其の語に明らかかなり。彼自ら何の異とする所あらざるべしと雖も、我に在りては古來未だ彼の如き不遜の國書に接したることあらず。怒らざらんと欲するも、豈能く得んや。當時彼

(一)今の朝鮮のこと。

相懸隔す

躊躇
理非明白

梟す

の國書を覽し者、一として書辭の不遜なるを咎め且憤らざるは無かりしならん。國土面積の廣狹相懸隔するの著しきを思ひて、國力を誤信せし者は、成るべく圓滑に局を結ばしめんとして開戦に躊躇したらんも、理非は既に明白なりしなり。元主使者を派して我を促し、我之を斬りて首を梟せしかば、其の怒りて兵を發し入寇せしもの、彼に在りては己むを得ざりし所ならん。則ち己むを得ざりし所ならんと雖も、其の此に出でたるは、もと我が國情に通ぜざりしが爲のみ。若し能く我が國情に通ぜしならんには、決して此に出でざりしなるべし。彼既に戦を開くに決し、十餘萬の大軍を發して入寇す。一夜颶風俄に起り、兵船多く覆没す。我が兵之に乗じて襲撃し、殆ど之を殲滅せり。乃ち言ふ者あり、當時若し颶

殲滅

危殆に瀕す

必勝の算

風起らざりしならば、我が國運或は危殆に瀕したりしならん。と言者の説にして當れりとせば、即ちかの開戦に決せしは、策の宜しきを得ざりしものと謂ふべけれど、而も其の言ふ所や實に謬れるの甚だしきものにして、我が開戦に決せしは必勝の算ありて然りしなり。假りに颶風起らずして、彼の陸兵皆上陸し得たりとせば、彼我の勝負則ち如何。元史に據れば、彼の兵數二十萬と號す。數に於て少からざれど、かばかりの軍隊を以て能く日本征服の功を擧げ得べきか。

一五 元 寇 其の二

元の時代は支那古今を通じて造船術の最も發達せし時といはれ、我に寇せし兵船は閣龍(コロンブス)の亞米利加發見に用ひし

Columbus.

兵站

糧を敵に因る

手を拱く

ものより、尙堅固なりきと傳へらるれど、其の颶風に遭ひて多く破壊せしに觀るも、以て畧構造の如何を察するに足らずや。彼累りに諸邦を征服せしも、かく多數の兵船を運用せしことは曾てこれ無し。また彼が操船に巧なりしかも疑なきを得ず。既に十萬、二十萬の軍隊を送遣せし後、猶絶えず兵站の連繼を過たざること、果して其の能くするを得る所なるか。糧を敵に因るの心算なりきとするも、全軍を支ふるに足るべき食料を徵發するは、頗る困難の業ならずや。若し我に於て、手を拱きて彼の欲するがまゝに従ひしならば、或は徵發に依りて全軍を給養し得たるべきも、これ到底望みて得べからざる所ならずや。

管に軍隊給養の難きのみにあらず、彼我交戦の結果、彼ま

(一)承久三年後鳥羽上皇の北條氏を滅さんとの戦亂

撃擢

武を練る

鬱勃たる士氣

(Marco Polo) 伊太利の旅行家、中央亞細亞、印度那等處に經りて、元祖に十年に仕へて、二十餘年間留る。

た勝つべからざる運命ありしなり。承久の亂、北條氏の兵畿内を指して西上せし者十九萬人、若し此に關西の兵を合せば、數に於て優に元兵の上に出づるを得しや必せり。加ふるに我は地理に精しく、便利を占むる事亦多し。十萬、二十萬の元兵を撃擢するに於て何か有るべき。戰亂を見ざること五十餘年に亙りしと雖も、國を擧げて武門の治を享け、未だ嘗て一日も武を練るを怠らず。爾後久しきを経ずして、天下麻の如く亂れ、數百年間唯戰爭をこれ事とせしもの、決して偶然なりとせず。當時此の鬱勃たる士氣を以て元兵に對す、之を殲滅するは寧ろ易々たりしなり。且マルコ・ポーロの記す所に據れば、元兵の大敗せしは、其の兩將の不和に基づける如し。我が軍の士氣旺盛なるを以てして、彼が主將の不和な

謬想

るに加ふる、單にこれのみを以てするも、勝敗の數既に明らかなりとすべし。如何なる點より察するも、我彼を殲滅するの理ありて、彼我を征服するの虞なし。我の斷々として拒絶せる、決して無謀の舉にあらず。神風の加護に頼りて幸に勝ちたりと思惟するが如きは、謬想に過ぎず。

目睹

龜山上皇の御身を以て國難に代らんと祈らせ給ひしはいとも畏し。既に、上皇の御身を以て國難に代らんとし給ふを目睹す、國內の民誰か奮つて國に殉せんとせざらん。之がために上下舉りて、國難に當らんとす。其の決心を固めたるや疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊を整へて東進し來りしとせんか、乃ち我が兵の如何に勇を鼓して邀撃せしかは知るべきなり。其の海上に於けると同じく、之を陸上に鑿殺

邀撃

醞釀

較著



龜山天皇木像

したるや必ずるに難からず。颶風の起りしは幸といふよりも、寧ろ不幸といふべし。元兵にして上陸したらんには、我初め多少の苦戦あらんも、終に全勝を制し、更に勢に乗じて高麗を畧し、かくて漸く醞釀せる國內の紛争を移して、外地の經畧を事としたりしなるべく、爲に我が日本の獨り較著なる發達を遂げしのみならず、東洋全體亦大いに進歩の見るべきものありしならん。颶風起りて戦はずして勝ちしより、竟に武を海外

に用ひず、徒らに國內の紛争に忙殺せらるゝに至りしは、洵に遺憾の極といふべし。

元は一敗して後更に再舉を圖らんとせしが、諫むる者ありて、事遂に止めり、智とすべきなり。此の一役に於て、だに海岸到る處造船の音喧しく、爲に費し、所莫大の額なりきと傳ふ、故を以て、若し一敗に懲りずして再舉を圖り、一層の準備を整へて我が國に來寇せしならば、國力の底を傾くるに至りしは疑ふべからず。何ぞ八十年後に分割せらるゝを待たんや。

底を傾く

—小泡十種—

一六 戰國武士

山路 愛山

日本は久しき間大地主の世なりき。彼等は各自を圍める

譜代の郎黨

單位

譜代の郎黨を有し、戰陣に臨む時は之を率ゐて進退を共にしたり。彼等は個人として戰はず、一家として戰へり。當時の社會が大地主の各一家を以て其の單位としたるが如く、當時の軍隊も亦大地主の各一家を以て其の單位としたり。蓋し社會の單位が、取りも直さず軍隊の單位となるは、すべての時代に普通なる現象なるが如く然りしなり。大地主たる一武士ありて出陣したりと假定せよ。彼の鎗を持して従ふ者は其の譜代の家來なり。彼の草履を携へて従ふ者は其の譜代の家來の若年なる子弟なり。彼等は皆一郷に成長し、其の地主たる武士を仰ぎて、主とも親とも視る者なり。これ戰國武士の状態なりき。されば當時は家老の子にして草履取たりし奇觀もありきといふ。

廩米

既にして、各地主の間に生存の競争漸く劇しきに及んで、武力を集中するの必要を生じたり。土地を失へる武士は各其の依頼せる大名の城下に集りて、其の廩米を供せられ、之に因りて所領の恢復を計らんとせり。大名も亦自らすゝんで廩米を以て天下の士を招けり。是に於て、武士は自ら二つの階級に分れたり。所謂譜代衆、浪人衆是なり。例へば奥州に於て田村氏の浪人衆は、其の初相馬氏の譜代衆なりしが、其の土地を失ひたるが爲に、皆田村氏に頼りたるものなるが如し。織田氏に於ても丹羽^(一)、柴田^(二)の類は譜代衆にして、明智^(三)の類は浪人衆なりき。而して城下集中の必要愈急なるに及んで、譜代の武士も亦其の土地を離れて、城下に集るに至れり。彼等は猶知行所を有したりき。然れども彼等は知行所に歸

(一)丹羽長秀
(二)柴田勝家
(三)明智光秀

知行所

り住む能はず。此のごとくにして社會の形勢は隔離的より集中的に一變せり。然れども其の單位たる家子、郎黨の關係は、尙變ぜざりき。浪人衆にても、譜代衆にても、すべての武士は城下に集ると共に、其の家子、郎黨をも同じく城下に携へたり。

大名の浪人衆なるものは、初より其の家臣に非ず。或一つの大名の攻撃を恐れて、隱家を他の大名の蔭に求めたるに過ぎず。或者は殆ど攻守同盟に等しき契約を結んで、與力同心したるに過ぎず。或者は功名心の満足を求むるために、強き大名に依頼したるに過ぎざれば、君臣の關係を見ること恰も主客のごとく、一たび意に合はざることあれば、直ちに袂を振つて去る者もありき。されど敵に克つべき實力は、唯

攻守同盟
功名心

辭を卑くし
禮を厚くす
(一) 島勝猛。石田三成の臣。關ヶ原役に出陣す。
(二) 後藤基次。はじめ黒田家に仕へ、後豊臣家に招かれて大阪陣に戦死す。

彼等を得ると否とに因りしかば、大名も亦競うて彼等の心を攬らんとしたりき。かゝりしかば、浪人は一箇の階級となりて天下に横行し、其の老功にして世に聞えたるものは、萬石を以て之を招くも、辭を卑くし禮を厚くして之を招くも、猶肯ぜざる者あるに至れり。島左近(一)の如き、後藤又兵衛(二)の如きは、善く當時の浪人氣質を代表せるものなり。

嘗て加藤清正が或敵と戦はんが爲に出陣したりし時、一個の浪人ありて、彼に謁していひき、御陣所を借りて見物いたしたし。と。清正は之を諾しぬ。翌日戦は始れり。鎗は交へらるべくして、未だ交へらるべき機會を得ざりき。兩陣互に睨み合ひつゝ、立てり。清正は苛ちて、早く鎗を交へよ。と命じたり。而して鎗は尙交へられざりき。清正は愈、苛ちたり。昨日の

浪人は十人許の一隊を率ゐて山の横側に現れたり。喊聲は其の一隊に因りて揚げられたり。敵の陣は動けり。鎗は始めて合はせられたり。敵は追崩されたり。浪人の一隊は敵の中に突入らず、唯徐に一二町を進みたりしのみ。彼等は清正の凱歌を揚げて還りし時、芝原に足投出して兵糧を食ひ居たり。清正は馬より下りて彼等に禮したり。浪人は一隊の姓名を清正に告げていへり、何れも浪人にて難儀なる體ゆゑ、御家を願ひとらせ度存じ、是迄召連れたり。召抱へさせ賜はれ。と。彼はかくの如く言ひし後、其の一隊を離れ、飄然として去りぬ。此の如きは、當時の浪人が四方を浪遊して主人を求むる状態なりき。

當時の社會的組織に就いて更に詳かに研究せんと欲せ

境遇は人を
作る

ば、海道被官てふ流行語に含まれたる意義を明らかにせざるべからず。當時の大地主等は、其の主人と仰げる大名に對して、固より確乎たる君臣の誼あるに非ず。彼等は唯鋒先鋭き者に降服して、其の土地を失はざらんことを欲するのみ。たとへば奥州の二本松、四本松は、何方へも弓矢強き方へのみ、身方したりといふがごとし。彼等は自己の生存の爲には、主人を替ふることを辭せず。強き大將の兵を出す時は、其の往來の道は盡く其の被官となる。而も其の一たび兵を収めて歸るや、彼等は原の狀に復る。上杉氏の關東を攻めし時、沿道の大小名盡く之に伺候し、其の去るや、直ちに再び北條氏に附きしが如きは、所謂海道被官の意義を實證せるものなり。境遇は人を作る。斯の如き血腥き世に於て、個人的勇氣の

血に渴す

極めて盛なりしは固よりなり。文祿慶長の役に於ける日本武士の舉動に關し、韓人の記す所に因るに、曰く、天性勇悍。自好戰伐。又曰く、死敵爲榮。又曰く、手不釋劍。伺人不意。必中其報。又曰く、好戰倭之性。爭死倭之業。と。敵人の觀察にして斯の如し。其の血に渴し死を喜ぶの態見るべし。殊に其の婦人の勇氣を尙びしに至りては、眞に驚歎すべきものあり。當時或妙齡の女子は、其の父の不在に乗じて數十人の強盜押入りたるを、怖るゝことなく、弓弦を鳴して之を追退けたり。家康の侍女七人、世に所謂七人衆は常に馬上にて陣中に從へり。天草陣の時にも、城中の婦女堀より上に半身を出し、大石を轉じて寄手を悩ましたりといへり。戰國武士は實に此の如き母の胎内に育てられしなり。

—愛山文集—

一七 力

幸田露伴

天に聳ゆる千尺の

巖二つに劈きて、

山も轟にたぎり落つる

水の力のたのもしや。

白雲絶壁を蝕んで、

老樹しづかに枯藤垂れ、

亂石せぎる谿狭く、

山靈水の去るを惜しめど、

我大海に到るべきなり。

我大海に行かんとぞ思ふ。

我力あり、

我すゝむ。

磧礫は我推流してん。

磐石は我躍り越えてん。

我力あり、

我休まじ。

遮る岩は岩潰してん。

止むる岸は岸崩してん。

我戦を厭はざるなり。

山靈

くやす

我が吶喊し、怒號する

聲は常磐に衰へじ。

見よ、大海に到らでは、

必ず已まじ、休まじ。と、

獅子と狂つて雷と鳴る

瀧川の水、瀧川の水。

水の力のたのもしや。

自己を支ふる物の力。

他を動かす物の力。

力まじはり萬象を爲す。

力無ければ世は空虚なり。

動いて休まぬ心臓の力に、六尺の身は熱き血を盛り、

進んで飽かぬ精神ありてぞ、人世五十夢ならぬなる。

—心のあと—

一八 戦争の精神

鹿子木員信

戦争の結果は正義の確定である。すべての國民は實に戦争に依つて、最も明確に其の世界史上、文明史上の地位を定め、人類中の階段を定めるのである。雄健にして勤勉、高貴にして優越した國民は、此の階段の上に、より高い地歩を占め、随つてより大なる活動の領域と、より大なる支配權とを得、之に反して劣等懶惰な國民は、それに相當する報を受けざるを得ない。かくして戦争はすべての國民に、其の優越の度に随ひ、其の地位と其の階段とを與へる正義の秤である。眠れるを醒し、腐れるを切捨てる神の劍である。人類が無限の文明史的向上の爲に健闘するに堪へぬ一切の腐敗、廢頽、衰

正義の秤

神の鋭い秋の風

亡の國民を振ひ落す神の鋭い秋の風である。戦争が人類の爲に秩序と階段とを齎す正義の劍であるといふことは、無論腕力、獸力、暴力が正義の尺度であるといふ事ではない。腕力といふ點に於て、我等日本人は決して支那人、歐米人に勝るものではない。若し腕力が勝敗の決を定めるものならば、我等は永遠に戰敗者の運命から脱するとは出来ないかも知れない。

戦争成立の條件、即ち戦争をして始めて可能ならしめるものは、實に義勇公に奉ずるの心である。此の道義的、英雄的精神なくしては、戦争に勝つはおろか、既に戦争其のものが不可能である。私慾、私情を超越して、偏により高いもの、即ち上に仕ふる熱情に燃えずして、大いなる戦争を勝利の光榮

超越

金城湯池

透徹

に導く事は、全然不可能の事である。かくして勝敗の決を定める重大な要素の第一は、實に道義的精神である。而して其の第二は、強盛な智力である。近世一切の進歩した科學を應用して、金城湯池と固めた近世の要塞を攻め、或は蜿蜒數百里に亙つてよく百萬の大兵を動かすことは、殆ど吾人の想像も及ばぬ優越、透徹、緻密、精細な智力に依らなければならぬ。而して透徹明哲な智力の必要なことは、獨り軍に將たる者のみに限らない。一艦を動かし、一飛行機を操縦し、一砲を掌り、一隊を指揮するにも、智力は其の缺く可からざる要件である。最後に軍事資金、即ち金力が戦争の根本要件たる事は、敢へて言ふの必要は無い。ナポレオンは嘗て人に戦勝の秘訣を問はれ、一も金、二も金、三も金、と答へたと

いふ。然るに金力即ち一國の富力は、或意味に於て國民平時の勤勉、努力、企業の結果に外ならない。

焦點
實力の評價

かくして、戦争は實に人間一切の力の發揮せられる所、一國民のすべての力の集中する焦點である。戦争は國民の其の時代に於ける實力の忌憚なき評價である。

消耗
爛熟
消磨

若し人類の間に戦争がなかつたならば、既に向上の猛志を消耗し盡して、爛熟頹廢した國民が、其の一度占めた地歩の上に立つて、文明、高尚、優美、老熟等の美名、いな虚名の下に、居常徒らに倨傲尊大、永く天下の權を私するであらう。而してかくの如く頹廢爛熟せる國民の支配の下に、人類は遂に其の健闘向上の精神を消磨し去らざるを得ない。かくして戦争は獨り神の正義の劍であるばかりでない、又實に向上

崢嶸

の鞭である。懶怠豚の如き人類を驅つて、向上崢嶸の路を踏
ましめるものである。

砥礪

人類は戦争に依つて、其のすべての能力を發揮し、其の精
神を砥礪し、其の自然性に鍛鍊陶冶の工を加へて來た。人類
のうち最も麗しく、最も貴く、最も美しいものは、すべて戦争
のうちから生れ出たものである。日本の精神のうちで、最も
貴く麗しいものは、實に其の武士的精神である。而して此の
高貴な武士的精神は、其の名の之を示すが如く、實に戦争の
中に生れたものであつて、決して多くの人のいふが如く、印
度や支那の教の生んだものではない。佛教、儒教の武士的精
神に及した感化は、何處までも感化に過ぎない。精神そのも
のは、これら印度、支那の教から獨立して、日本固有の精神の

うちに、劔戟の間から生れ出たものである。武士的精神、これ
我等の國民的精神の最も美しい劔戟の火花であり、其の最
も強い矢叫の聲である。 — 最近思潮教育夏期講義録 —

一九 夏のさまぐ

姉崎 正治

夏といへば一番暑い時、冬といへば一番寒い時、これはい
ふまでも無い事であるが、然し今までに随分暑い冬を過し
たこともあり、涼しい夏を暮したこともある。一番涼しかつ
たのはスコットランドの夏で、日本ならば秋の涼風の立つ
頃、日中暫くは外套を脱いでも、朝夕は重着もしなければな
らぬ程であつた。しかしそれでも夏は夏で、朝早く起出でて、
五時頃には已に日が高く、夕暮には九時過でもなほ明るい。

(Scotland.)

朝の日光が青々とした野山を照らし、野に咲く桔梗や露草に露の滴つた様は、やはり夏の朝の爽かさである。夕暮に薄明りがいつまでも残り、山々も湖面も灰色になつて、天地が一幅の墨繪になつても、空には夕焼の黄金色が満ちて、夜の來る歩みはおそい。食後縁側など、いつまでも語りつゞけては、やはり夏の夕の樂しさがあつた。

其の反對に暑い冬を印度で過したが、朝から外出するには、大きなヘルメットを被り、青眼鏡をかけなければ、眼がぎらぎらする。日中には長く歩行するのは危険な位である。野山は水氣の無い爲に枯果て、木枯の吹いたあとのやうではあつても、時候は夏の温度である。それゆゑ日が西に入つてやゝ涼風の立つ頃、馬車を驅つて菩提樹や榕樹の並木の

〔Helmet.〕

下を行けば、僅かに車の駈けるだけの風が面を打つ。それでも天地は青々と霞んで、夕焼のほてりも漸く去り、東の空に月が靜に出ては、涼しい月の雫を浴びるにも似て、日本の夏の夕に劣らない清爽の感があつた。

〔Ceylon.〕

錫蘭島に行けば、印度本國とは違つて、年中樹は緑で鬱陶しい程茂り、四時花が咲いて盛夏の如くである。朝早く車を驅つて森の間、湖水の邊を行くと、鱷が道に横たはる。孔雀が驚いて飛出す。猿は木の上に遊び躍る。大きな蜥蜴は足音を聞いて水に逃込む。熱帯の動物界は朝早くにのみ見られる。午後になれば、大抵毎日夕立が來て強く雷が鳴り、其の霽れた後には、夕方が蒸暑く呼吸も苦しい程であるが、到る處螢が群れて飛ぶので心が慰まれる。

印度洋には冬と夏との區別があつて、冬は東北の風が吹きつゞき、海は蒼く氣は爽かであるが、夏になつては、西南の風に空も海も黄ばんで濁り、吹く風は湯氣を浴びたやうに蒸暑い。其の中間に靜穩な時もあるが、此の靜穩の暑さは却つて苦しく、見渡す限り海は油を流したよりも靜に、そよ吹く風も無い。時々午後に龍卷の上る時などは、一時風は吹いても、あとは靜で、五體は空や海と共に油の如く融けたかと思ふくらゐだるい。暑いといへば暑いが、忍耐の力は或程度までこれに克ち得るのである。

いろいろの國にさまざまの趣はあるが、苦しいのは日本の濕氣の多い夏、伊太利で沙漠から來る砂を交ぜた熱風とシロツコの吹く時、快いのは一體に北歐の夏、緑は滴るが如

(Sirocco.)

く、柔い草の上に寝ころんで讀書をしても、蛇の憂も無ければ、蚊にも刺されない。さうして婦人や子供は白い着物を着て、蝶々のやうに綠蔭を飛んで歩いてゐるのである。

— 停雲集 —

二〇 大鳴門の眺

久保 天 隨

そも鳴門といふに二箇所あり。鳴門岬に近きは^(一)大鳴門にして、小鳴門と呼ぶは、なほ北に數里を隔て、北泊^(二)のあたりなりといふ。さてこゝの海峡には、中程と覺しき所に、廣さ數百歩なる平岩あり。中の瀨と名づく。之と並びて巨礁數を知らず。かく瀨の巖に續ける處は水底さまでならねど、其の左右は俄に深くなりゆき、奈落の底に通ふかと疑はれて、百俣

(一)淡路國の西端。

(二)阿波國瀨戸村の大字。

(三)鳴門海峡。

奈落の底

(一)讚岐國大串崎の北方海中。

ねぢく

末廣に開く

それかあら

ぬか

渺漫

ほのめく

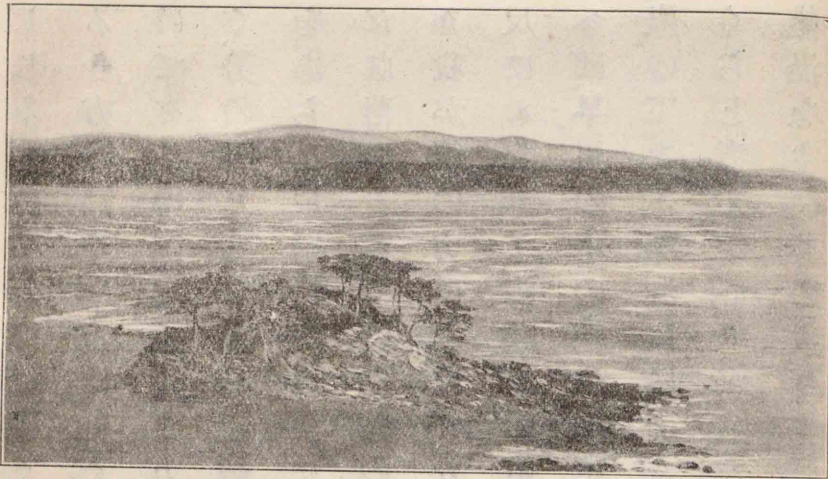
山輝水映

午天の陽光

にも餘れりとぞ。折しも銀潮みち湛ふれば、巖どもは沈みて見えわかず。遙に讚岐の山々、小豆島(一)などの霞みて見渡さるるのみ。瀬より少し南に離れて、飛鳥とて殊に大いなる巖あり。形寶珠の如く、上には松などねぢけて生ひたり。こなたの海は扇に似て末廣に開き、阿波の椿の泊、紀伊の日の御崎など、それかあらぬかと、ほのかに認められ、碧波渺漫として果も無く、目に遮るものとは、ほのめく白帆の影のみ。近きあたりには、海士の小舟を漕出でて、藻かり、魚釣などするもの多く、この波間には水を潜りてあさる鵜の鳥あらはれ、かしこの岩根には翼休むる鷗あり。山輝水映の景色は、雲無き午天の陽光に一入の匂を添へて、打見るかぎり、繪にいとよくも似たりけり。もとより形勝のきこえある此の地の、かく

景趣

此の時早く



景趣はありながら、唯これのみにては殊に壯觀といふべくもあらねば、今や人々の久しく語り聞えし言の葉も疑はれて、早大く潮落ちよかし、渦巻くさまはいかならん。など眩きつゝ、目たたきもせずうち守りてぞありし。

此の時早く、海山いづくとも無く鳴る音して、中の瀬の巖のあたりに、潮頭の崩るゝが見え初めぬ。これぞ退潮のはじまり

なだれ落つ

彈指の間

水準

網代木

鼎の沸くが
如し

ししるしにて、外洋は早く引けども、内海は遅ければ、見る見
る一方は高く、一方は低くなりもてゆきて、瀬戸海の水を傾
けてぞ此の門にあつまり来るなる。其の疾きことは矢の如
く、勢の凄じさは磐石の轉倒にも譬ふべきばかりにて、鎧岩
をあらひ、戸崎を衝き、更に横に折れて、かくは中の瀬よりな
だれ落つるなりけり。此の轉變は彈指の間に起りぬれば、拙
き我が筆の力に及ばず。なほ打見であるに、水準の差は六七
尺にもなりて、海峽十餘町の間は全く瀧のさまを現じ、たと
へば、早川の水の網代木にせかれてたぎるに異ならず。瀬の
巖の下なる深淵には、一たび落ちたる潮の、また底よりくら
くらと煮えかへりて、さながら鼎の沸くが如く、忽ちにして
盤渦を生ず。其の大きさ、徑三間許と覺え、勢は緩やかなれど、

狂奔馳逐

轉拗

輾落

震轟
地軸

さすがに怖ろしげなり。瀧の落つる事烈しければ、驚瀾駭浪
争ひ騒ぎ、盤渦の中に入るものは跡なくなりゆけど、外にあ
るものは狂奔馳逐して、後浪と前浪と相及び相闘ひて潮頭
を碎き、寄せては返し、行きては走り、輪旋すること百回にし
てやまず、遂に中心の凹みとなりて、又渦を作る。こは小さけ
れども、巻くこと甚だ急にして、其の邊には必ず逆廻せるも
のを作りて、ひたすら轉拗するに似たり。かくて大渦、小渦の
沸涌するもの數を知らず。はては互に揉合ひ揉合ひ、且現れ、
且ふたがる。潮の愈、退くに隨ひ、瀬なる巖の尖頂愈、露れ來れ
ば、亂濤山の如く襲ひ進み、打越えて輾落し、今は海底鳴動し
て、千輛の雷車一時に震轟するが如く、地軸も打拉うちひがれん許
なり。碎けては散る波の花、萬顆の泡珠は長空に晴雪を飛ば

颯々の響

跌宕

(一)支那直隸省順
德府平鄉縣。順
紀元四百五十一
六年項羽大いに
に秦の軍を此に
破る。

(二)支那河南省南
陽府葉縣の南。
紀元六百三十八
年漢の劉秀王莽
を此に破る。

蛟龍も驚駭すべく
鯨鯢も奔蹙すべし

睨視

し、天風潮氣を捲けば、巖上の松の梢に颯々の響あり。誠に瀨戸海の潮の息、唯半里の喉元にせまりて喘ぐなれば、かくなれるもことわりといふべく、見る様の壯快にして跌宕なるは、鉦鹿の戦に殷聲呼んで地を撼かし、昆陽の役に百萬の兵を一撃に鑿にしたるに比ぶべくもや。蛟龍も驚駭すべく、鯨鯢も奔蹙すべしとこそ覺ゆれ。まのあたり見る身は慄然として震ひつ、毛髮逆さまに豎ちてそゞろ寒きほどなり。ありし小舟のいくつは、遙に福良の方に退き、鷗などもいづ方へか隠れぬ。折しも俊鶻一羽中空を輪に舞ひて、行者が鼻なる高巖の頂に下り、翰を取めて睨視するがありけり。時のうつりゆくまゝに、奔潮はますます怒りて、射注の勢終に止むべくもあらず。下りて飛鳥を衝き、餘流滔々として

卓犖
胸宇を衝く
豪懷

掀簸

天風に嘯く

南に下り、海中明らかに一條の急川を馳せしむ。我等初のほどは神驚き、心死して、面に血の色なき迄なりけるに、漸く自ら蘇し、濶大卓犖の感の胸宇を衝くに方りては、豪懷物の譬ふべきにあらず。舟子に命じて試に我が船を渦の中に入れしむ。一葉軽くして水天と抗し、掀簸上下してめぐるさま、獨樂に等し。かの大渦に入るれば、一分時ならずして一旋し終り、小渦に於ても五分を出でず。渦の轉拗するにつれて、急川の裏に吐出され、流に乗りて下らんとすれば、急につと漕返し、また渦に入る。かくすること幾度なるかを知らず。其の間舷を叩きて天風に嘯き、身はずでに仙化せる思あり。舟子は楫をとめて、今はこれ初秋の頃にして、觀潮には好き時なれども、三月の大潮には瀧の高さ二間に近く、心も言葉も

飛箭弦を離る

(一)淡路三原郡灘村の海上。

魂魄波に漂ひ恍惚無有の境にさまよふ

をさく

及ばぬばかりなり。われ等はよく險に慣れたれば、かゝる折を待ちてわざと舟を下す。そが潮にひかれて走るさまは、飛箭の弦を離れたるが如く、四里の海路も半時ならずして流れ下り、沼島(一)のあたりに着くべし。などいふ。かくいふ中にも潮の勢いやまして、いつやむべしともおもほえず。豪快今は極りて悽愴の感を惹き、魂魄波に漂ひ、恍惚無有の境にさまよひて、夢とも現とも分かさざりけり。さるほどに日もやゝ西に傾きて、五時頃とも覺しき程になりければ、今はとて舟を南にうつしぬ。此の時までありしかの俊鶺は俄にたちて、二度三度こなたを顧つゝ、南に飛びていつしか暮雲の中に跡を隠しつ。船は急川の裏に入りぬれば、一瞬千里の勢にて、富士川の川船にもをさく、劣らず。

效焉

(一)淡路津名郡。黯然

やゝ時を移して、辛くも流の外に截出でて帆を揚ぐるに、こは海面鏡の如くにて、追風さへそひければ、半時ばかりにして、撫養の浦近くなりぬ。かなたこなた、蒲帆斜に夕陽を孕みて、漁歌歎。乃の相答ふるも聞え、沼島のあたりに、紅霞一片たなびき渡りて、鳴門の海峡には輕霧既にたちこめたり。淡路島山もはや暮れかゝり、先山(二)の翠は黯然として別を惜しむの色をなし、昨日杖を曳きたるあたりの忍ばるゝこそ、いとをかしかりけれ。——時文軌範——

山谷の 一一一撮の鹽

新渡戸 稻造

俊傑の士も、之を崇拜する人の信ずるが如くに完全なること稀にして、汝の敵が、汝の考ふるが如くに悪人なること

樂天家

厭世家

も亦更に稀なり。富士山が畫家の筆に上るが如き美觀を以て其の靈姿を現ずるは、一年僅かに數日のみ。されど又其の山容の黒雲に蔽はれて全く見ることを得ざるが如き日は更に少し。人生は、樂天家が其の歌に述ぶるが如くに樂しきものにもあらざれば、又厭世家が悲しき歌もて訴ふるが如くに苦しきものにも非ず。

一撮の鹽。吾人は鹽を用ひて、すべての物を加味し、吾人の趣味に適せしむべきなり。人は各異なる所あり。誰しも其の隣人と悉く一致すること能はず、又多少の斟酌を施さずして、誰しも其の友人もしくは其の敵の意見を承認すること能はず。

天使

天使の歌ふや、吾人は莞爾として之に耳を傾くと雖も、な

斟酌

眞理の閃光
無意識
訛傳
實在

嚙下

ほ其の歌調の高きに過ぐるを感ぜざること能はず。悪魔の叫くや、或は其の語中に多少の眞理を發見せんとして之に聽く。黄金を砂塵中に認むるが如くに、大いなる虚言にも往々眞理の閃光あり。また眞實なる談にも、時として無意識の訛傳の潜めるあり。最も賤しき實在にも理想存し、最高の理想も、卑賤なる行爲によりて、其の全部もしくは一端を實現せしむることを得るなり。一撮の鹽なるかな。されど、吾人は注意して其の分量を誤るべからず。多きに過ぐれば甘きをも若くし、少きに過ぐれば不味の肉を嚙下せざるべからず。判然と鹽の分量を定むる嚴密なる規則の據るべきものあるに非ず。人は各自自家の鹽量計を有すべきなり。悉く書を信ずれば書無きに如かずと、書を讀むには分別あるべく、學

批評眼

緩和者

實業
其
堵に安んず

ぶには批評眼あるべく、考ふるには敬意を以てすべし。正確なる判断、善良なる趣味は人生の必需なり。節度貴き中庸は正當なる判断、良好なる趣味を得るの秘訣なり。あゝ此の鹽は緩和者なり。
二三 舊藩の明君 其の一
徳川時代三百藩は、各其の土地人民を領して、一々別國の觀を呈してゐたが、いづれも學者を聘し、賢者を擧げ、學問を勧め、産業を起し、出来るだけの善政を布いて、封内の人民をして、其の堵に安んぜしむる様にと苦心した。鎖國の二百六十餘年間は、かくして太平無事の世であつた。上下の階級がやかましく、職業世襲の制度で、技能材幹あるものの新進の

實踐躬行
齊家
治國平天下

道は十分に開けて居らなかつたが、四民皆其の分に安んじ、其の業を樂しんで、何等の不平等もなく、安穩な生活を營んで居つた。凡そ世界の歴史で、これ程安樂な時世は無かつたらうとさへ、或外國の史家は言つた。
大學、中庸、論語、孟子の四書は忠孝の道を訓へる儒教の經典で、武士は之を學んで、實踐躬行の標準とした。いづれも齊家を本として、治國平天下の大道を教へたので、個人の修徳から社會の改善に進まうとするのである。孟子の書には殊に人君たる道、人民を治める道を説いた文章が多い。君主は天に代つて人を治めるので、君徳の無い者は君主たる資格が無いといふ支那思想が、其の根本になつて居る。各藩の藩主は皆それを自分の事として、徳を修め、治に勵むことに工

進講

夫した。各藩の儒者はみな此の旨を以て主君に進講したのである。間、暗君で民を虐げたものも無いではないが、概しては各藩に賢明な主君があつて、民衆の福利を圖つたのである。各藩の藩祖には明君と稱へられた人が多く、各其の遺訓を子孫に傳へて居り、歴代の主君は亦皆藩祖の遺訓を守つて、ひたすら其の家門を辱めまいと考へて居つた。今各藩主の顯著な治績に就いて其の二三を記さう。

徳川義直は家康の第九子で、尾張名古屋の藩祖である。慶長十二年始めて尾張に封ぜられ、十四年名古屋に城を築いて之に居り、慶安三年五十一歳で歿した人である。此の頃は戦亂が纔かに息んだばかり、人々は武藝を修めるばかりで、諸藩ともに學政に心を傾ける人は少かつた。義直は此の時

聖堂
釋奠

に於て、儒教を尊奉し、聖堂を建て、釋奠の祭を行ひ、經籍も多く集めて、盛に藩中の學問を奨励した。文教に於て、實に諸藩に率先したのであつた。尾張の敬公といふのは此の人で、明治三十三年正二位の贈位があつた。

紀州和歌山の藩祖頼宣は義直の次の弟で、家康の第十子である。大阪の冬の陣に、十三歳の初陣をした人で、智畧もすぐれて居つたから、殊に家康に鍾愛せられた。夏の陣に軍功の無いのを悲しんで、十四歳は再び來らず」と言つたのは、名高い話である。武勇ばかりではなく、文事をも好んで、詩歌にも堪能で、學者を登庸して、よく其の諫を容れた。或時藩吏の某々等が、諸處の土地を開拓して、新田を作ること願つた。頼宣は之を聞いて、我が領分の中には、あまたの名所舊跡が

堪能

あつて、累代の和歌集にも載つてゐる。汝等唯實利をのみ圖つて、天下後世の物笑になるな。と言つたので、其の事はやめになつた。



徳川光圀 圖

頼宣の同母弟頼房が水戸の藩主で、其の第三子が有名な光圀である。忠孝の志も厚く、仁慈の徳にも富んで居つて、種々な善政を施したが、就中後代までも其の偉勳を留めたのは、學者を集めて大日本史の編纂に着手した事である。それが爲に藩祿の半分を割いてあてたのである。國體論、尊王論の根ざしはこゝに生じたので、光圀の修史事業が、遠く明治維新の原因をなして居るのである。

陞叙

明治二年從一位の贈位があつたが、同三十三年には更に正一位に陞叙せられた。

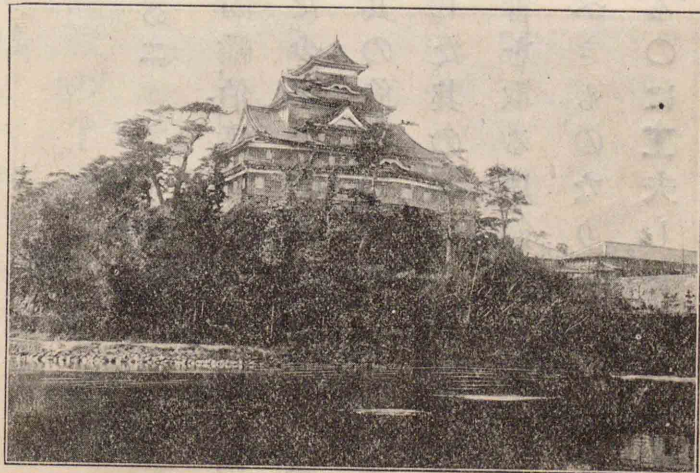
二三 舊藩の明君 其の二

池田光政は輝政の孫で、初め因幡伯耆を領したが、後備前の岡山三十二萬石の主となつた。少年の頃の夜食は茶漬に焼味噌のみであつたといへば、其の儉素の程も知られる。後熊澤蕃山を用ひて庶政を改善した。其の語に、人に下り、目の前の事をも人に尋ね、相談して善を取る所、儉約の第一なり。衣服、家作等は儉約の枝葉たるべきものなり。と言つたのを見れば、如何に其の人言を容れるのに工夫したかが分る。或時封内の農甚助といふ者が、親孝行の廉で褒賞を得た。それ

人言を容る

を羨んで、甚助の隣のもものが其の眞似をしたところ、光政は同じくこれにも褒賞を興へた。或役人、彼は似せもので御座います。」と言ふと、光政、似せでもよい。孝行を勵むがよい。」と言つたさうである。

加賀百萬石の前田家の第五代の主君を綱紀といつた。三歳で父の後を繼いで、八十二歳で死ぬまで、七十九年間在職したのも珍しい事である。藩政を改革し、學問を奨励した事蹟は一々擧げると暇が無い。其の領



城 山 岡

徳通

土加賀、越中、能登の三箇國の獄屋が全く空虚であつたといふのでも、其の政治の行届いた有様が知られよう。徳川光圀が「嗚呼忠臣楠子之墓」といふ碑を湊川に建てたのも、此の綱紀の徳通に基づいたのだといふ。



上 杉 鷹 山

上杉鷹山、名は治憲、米澤の城主である。學問を好み、學者を禮遇し、時々國中を巡視して、孝子を表彰することを怠らなかつた。農業を奨める爲、自ら泥田の中に立つて、鋤を執り、家老以下をして之に倣はしめた事もある。儉約を第一とし、種々産業を興すことを令したので、藩中の風儀も全く改つた。米澤織など今日の産物となつて居

適材を適處
に用ふ

るのも、全く鷹山が勤勉の遺徳である。熊本藩の賢君は細川重賢である。よく役人を抜擢して、適材を適所に用ひたので、學問も興り、士風も奮ひ、藩政も面目を一新した。天明年間の大饑饉の時の事であつた、勘定方の役人が重賢に向つて、今年は収入の減少が夥しいから、諸士の祿高を減らして、入用に立てたらば、と建議した。重賢之を聞いて、大節に臨みて死を致すのは武士ではないか。武士の俸祿を減らしては、事に臨んで義氣の緩むこともあらう。減らすことは相成らぬ、と承知しなかつた。又米價が騰貴して、隣國では餓死者が頻りに出來た程であつたが、重賢は國中に令して、米價の小賣直段を定めさせ、若し市中の米が皆無にならば、藏の米を出して補ふといふ事に定めたので、領内

大節

皆無

參勤交代

(一)大分郡の町。

の米價は直ちに下落した。されば其の後參勤交代で東上する途中、豊後鶴崎(一)まで三十里が間は、國中の人民が皆路ばたに跪いて感泣したといふ。かういふ様な明君の事蹟は數限りも無く多い。徳川時代の昌平無事も、全く偶然の事柄では無かつたのである。

二四 學習の説

幸田露伴

學を爲す中に悅樂の言ふべからざるものあるを悟れば、自づと學に努め、業を精しうするにも至れど、學問といふことを唯骨の折れ、根の盡くることとのみ思ひ居る様にては、何程志を勵まし、意に策うつとも、我知らず弛みも隙も出づるものなり。さらば學問の滋味はいかにして覺ゆるぞとい

ふに、別に異なる道のあるにはあらず、唯誠實に學びたることを繰返し繰返して重ね習ふ時は、自らに得るところありて、嬉しさ悦ばしさに、人知れぬ笑の催さるゝに至るのみ。

學ぶといふはもと、前賢古聖の道を學ぶにせよ、射御書數の藝を學ぶにせよ、我が心にも上らず、我が手にも入らぬことを學ぶなり。例へば舟を操ることを學ぶが如し。是の如くに早緒といふ物を船底に取着け、是の如くに其の早緒を櫓にかけ、是の如くに櫓臍を櫓杭に安んじ、是の如くに櫓を推し、是の如くに櫓を挽き、舟を右せんとする時は、是の如くに推すことを多くし、左せんとする時は、是の如くに挽くことを多くすと教へられて、一々之を承くるは、これ即ち學ぶところなり。學びて後自ら櫓を執つて漕ぐに、容易に漕ぎ得る

ものに非ず。或は櫓臍逸れて力を入るゝに處無く、或は推すことを多くせんとすれども、却つて挽くこと多くなりて舟愈、左し、或は挽くことを多くせんとすれども、却つて推すこと多くなりて舟愈、右し、心焦れて手痿え、氣喘ぎて、脚蹙むのみ。たゞ日々時々繰返し繰返して之を重ねる時は、少しづつ我が思ふ様になり、初めて三間四間の間、五間十間の程は危げながらも漕ぎ得るに至る。其の時の心中の悦は人はいざ知らず、我に取りては寒けき室の内に暖き日の光の射込み來るを見るが如く、言ふべからざる滋味あり。さて猶重ね重ねて櫓を扱ふことをすれば、終には空嘯きながら漕ぎても櫓臍も逸れねば、舟も廻らず、操舟の技そこに成就するなり。

志を立てざらば己みなん、志を立てなば學ぶべし。學ばざ

らば已みなん、學びなば繰返し繰返して倦まず、之を習熟すべし。習熟すれば喜悅其の中にあり。孔夫子曰く、學びて時に之を習ぬ、亦説ばしからずや」と。

悦樂

(一)後醍醐天皇。

二五 阿新丸 其の一

さるほどに、君の御謀叛を申し勸めけるは源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝なり。各死罪に行はるべしと評定一途に定まりて、まづ去年より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと、其の國の守護本間山城入道に下知せらる。

此の事京都へ聞えければ、此の資朝の子息邦光の中納言、其の頃は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人

(二)正中元年。

(一)山城國葛野郡花園村。

に成り給ひしより、仁和寺邊に隠れて居られけるが、父誅せられ給ふべき由を聞きて、今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて冥途の旅の伴をもし、又最後の御有様をも見奉るべし」とて、母に御暇をぞ乞はれける。

母御頻りに諫めて、佐渡とやらんは人も通はぬ怖ろしき島とこそ聞ゆれ。日數を經る道なれば、如何にしてか下るべき。其の上汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず。と泣悲しみて止めければ、よしや伴なひ行く人なくば、如何なる淵瀨にも身を投げて死なん。と申しける間、母、いたく止めなば又目の前に憂き別れもありぬべしと思ひわびて、力なく、今まで只一人附副ひたる中間を相副へて、遙々と佐渡國へぞ下されける。路遠けれども乗るべき馬も無けれ

中間

ば、履きも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露わくる越路の旅、思ひやるこそ哀なれ。

都を出でて十日あまりと申すに、越前の敦賀の津に着きにけり。これより商人船に乗りて、程なく佐渡國にぞ着きにける。人してかうといふべき便りも無ければ、自ら本間が館に至りて、中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが立出でて、此の内への御用にて御立ち候か。又如何なる用にて候ぞ。と問ひければ、阿新殿、これは日野中納言の一子にて候が、此の頃斬られさせ給ふべしと承りて、其の最後の様をも見候はんために、都より遙々と尋ね下りて候。といひもあへず、涙をはらくと流しければ、此の僧心ありける人にて、急ぎ此の由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすが哀

中門

岩木ならず

持佛堂

にや思ひけん、やがて此の僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて、踏皮行纏解かせ、足洗ひて、疎ならぬ體にてぞ置きたりける。

よみ路の障

阿新殿これを嬉しと思ふにつきても、同じくは父の卿を疾く見奉らばや。といひけれども、今日明日斬らるべき人にこれを見せては、なかくよみ路の障ともなりぬべし。又關

鄙の住居

數ならず

東の聞えも如何あらんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔りたる處に置きたれば、父の卿は之を聞きて、行末も知らぬ都に、いかゞあらんと思ひやるよりもなほ悲し。子は其の方を見やりて、浪路遙に隔りし鄙の住居を思ひやりて、心苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。これこそ中納言のおはします半の中よとて見やれば、竹の一むら茂りたる處に堀掘廻らし、塀塗りて、行通ふ人も稀

生を隔つ
無からん後
の苦の下

なり。情なの本間が心や。父は禁牢せられ、子は未だ幼し。たとひ一所に置きたりとして、何程の怖かあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、無からん後の苦の下、思ひ寝に見ん夢ならでは、相見ん事もあり難しと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそ哀なれ。

五月二十九日の暮ほどに、資朝卿を牢より出し奉りて、遙に御湯も召され候はぬに、御行水候へ。と申せば、はや斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、嗚呼うたてしき事かな。我が最後の様を見んために、遙々と尋ね下りたる幼き者を、一目も見ずして果てぬる事よ。とばかり宣ひて、其の後は曾て諸事につきて言葉をも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひたまひけるが、人間の事に於ては、頭燃

うたてし

顯密の工夫

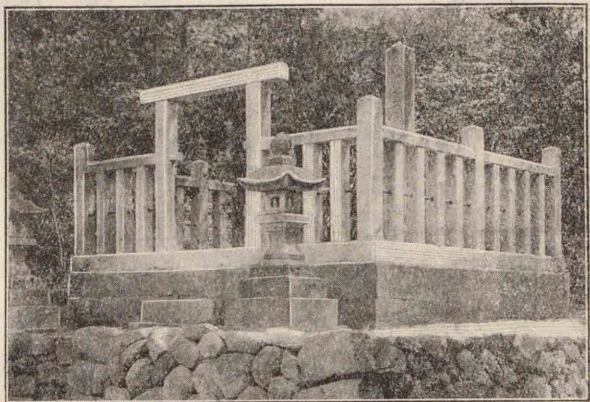
を拂ふ如くになりぬと覺りて、たゞ顯密の工夫の外は餘念

ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乗せ奉り、此處より十町ばかりある河原へ出し奉り、輿昇きすゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直りて、辭世の頌を書きたまふ。

五蘊假成形。四大今歸空。

將首當白刃。截斷一陣風。

年號、月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上落ちて、體は猶坐せるが如し。此の程常に法談などし



佐渡日野資朝の墓

法談

給ひける僧來て、葬禮式の如く取營み、空しき骨を拾ひて、阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、「今生の對面遂に叶はずして、變れる白骨を見る事よ。」と泣悲しむも理なり。

二六 阿新丸 其の二

所存

阿新未だ幼稚なれども、けなげなる所存ありければ、父の遺骨をば只一人召使ひける中間に持たせて、「まづ我よりさきに高野山に参りて、奥の院とかやに納めよ。」とて、都へ歸し上せ、我が身は勞ることある由にて、尙本間が館にぞ留りける。これ本間が情なく、父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふゆゑなり。かくて四五日經ける程に、阿新晝

勞ること

ひねもす

は病の由にてひねもすに臥し、夜は忍びやかにぬけ出でて、本間が寢處など細々に伺ひて、隙あらばかの入道父子が間に、一人さし殺して、腹切らんずるものと思ひ定めてぞ狙ひける。

遠侍

或夜雨風烈しく吹きて、宿直する郎等共も皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つ處の幸よと思ひて、本間が寢處の方を忍びて伺ふに、本間が運や強かりけん、今夜は常の寢處を變へて、いづくにありとも見えぬ。又二間なる處に燈の影の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあらん。それなりとも討ちて恨を散ぜん、ぬけ入りて之を見るに、それさへ爰には無くして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ只一人臥したりける。よしやこれも時にとりては親

の敵なり。山城入道に劣るまじと思ひて、走り掛らんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、たゞ人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明らかなれば、立寄らばやがて驚き合ふ事もやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず、如何せんと案じ煩ひて立ちたるに、折節夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲の、數多明障子に取りつきたるを、すはや究竟の事こそあれと思ひて、障子を少し引きあけたれば、此の蟲數多内へ入りて、やがて燈を打消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にありて、主はいたく寢入りたり。まづ刀を取りて腰にさし、太刀を抜きて胸元にさし當て、寢たる者を殺すは死人に同じければ、驚かさんと思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚

はたと蹴る

く所を、一の太刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛さし切りて、心靜に後の竹原の中にぞ隠れける。本間三郎が一の太刀に胸を通されて、あつといふ聲に、番衆も驚き騒ぎて、火を點して之を見るに、血のつきたる小さき足跡あり。さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ。搜し出でて打殺せ。とて、手にく松明を點し、木の下草の蔭まで、残る處なくぞ搜しける。

阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき。人手に掛らんよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ。今はいかにもして命を全うして君の御用にもたち、父の素意をも達したらんこそ、忠臣、孝子の義にてもあらんずれ。もしやと一まづ落ちて見ばやと思ひ

返して、堀を飛越えんとしけるが、口二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべき様もなかりけり。さればこれを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へ、さらさらと登りたれば、竹の末堀の向ふへ靡き伏して、やすくと堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に乗りてこそ陸へは着かめと思ひて、たどるく浦の方へ行く程に、夜もはや次第に明離れて、忍ぶべき道も無ければ、身を隠さんとて日を暮し、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隠れ居たれば、追手どもとおぼしき者ども百四五十騎馳散りて、もし十二三ばかりなる兒や通りつる。と道に行逢ふ人毎に問ふ音してぞ過行きける。

阿新其の日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志

擁護の眸を廻らす

して、そのことも知らず行く程に、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をや廻らされけん、年老いたる山伏一人行逢ひたり。此の兒の有様を見て痛ましくや思ひけん、これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ。と問ひければ、阿新事の様をありの儘にぞ語りける。山伏之を聞きて、我此の人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、御心安く思し召され候へ。湊に商人船共多く候へば、乗せ奉りて、越後越中の方まで送りつけ進らすべし。といひて、足たゆめば此の兒を肩に乗せ、背に負ひて、程なく湊にぞ着きける。夜明け、便船やあると尋ねけるに、折節湊の内に船一艘も無かりけり。如何せんと求むるところに、遙の沖に乗浮べたる大船、順風になりぬと悦びて、檣を立て、篷をまく。山伏手を上げて、

かはゆき目

聲を帆に上

柿の衣の露をむすぶ
数いらたか珠

勤行

肝膽を碎く

「其の船これへ寄せてたび給へ。便船申さん。」とよばはりけれども、曾て耳にも聞入れず。船人聲を帆に上げて、湊の外へ漕出す。

山伏大きに腹を立て、柿の衣の露をむすびて肩にかけ、沖行く船に立向ひて、いらたか珠數をさらくとおし揉みて、『持秘密咒生々而加護奉仕修行者猶如薄伽梵』といへり。況や多年の勤行に於てをや。明王の本誓あやまらずば、權現、金剛童子、天龍夜叉、八大龍王其の船此方へ漕返してたばせ給へ。と、跳り上り、跳り上り、肝膽を碎きてぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やしたまひけん。沖の方より俄に悪風吹來りて、此の船忽ちに覆らんとしける間、船人どもあわて、山伏の御坊まづ我等を御助け候へ。と手をあはせ膝を屈

め、手にく船を漕ぎもどす。汀近くなりければ、船頭船より飛下りて兒を肩に乗せ、山伏の手を引き屋形の内に入りたれば、風は又もとの如くに直りて、船は湊を出でにける。

其の後追手ども百四五十騎馳來り、遠淺に馬をひかへて、『あの船とまれ。』と招けども、船人之を見ぬよしにて、順風に帆を揚げたれば、船は其の日の暮程に、越後の府にぞ着きにける。阿新、山伏に助けられて、鰐口の死を遁れしも、明王加護の御誓、いちじるかりけるしるしなり。

——太平記——

鰐口の死

二七 月雪花

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。

群陰皆影を伏す

有象無象

日は赫々として仰いで見る事も出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破せられるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない清涼の光である。皎潔無垢、崇美と稱ふべきやさしい光である。休息、安靜の夜には最もふさはしい此の光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じずる。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光の、人の胸懷にしみ渡ること、は、恰も其の影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。

詩的情緒

(一)賀茂真淵の門人荷田蒼生子の歌。

「うち向ふ月は一つの影ながら、うかぶは千々の思なりけり。」である。

古往今來

東西古今、悲喜哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、此の光に向つて訴へられた。之を嗟歎し、之を吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充滿ちて居る。天文學者は曰ふ、「月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。」と。此の冷たい光が、古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富、貴賤の差別なく、其の純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓、茅屋も皆同じ色に埋められる。花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪降るみ吉野の山。といふやうに、眼に入る物、

(二)新續古今集。僧仙覺の歌。

(一)唐の詩人白樂天の句。

瓊玉を敷く

對照の妙
變化の奇

悉く其の下に包まれてしまふ。三千世界銀成色。十二樓臺玉作層。の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來る此の純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、また、く中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色のながめはもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も目のさめるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉も無い冬枯の時に、地上の萬物が此の銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものである。

いか。一年中蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程楽しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としてはあまりに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへ有つて居る。我等の食用の爲に作つた菜や、大根の花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理は無いが、山の花、野の花、いづれも月雪と同じ様に、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれほど寂寞を感じるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の

(一) 年ふれば
は老いぬれば
はあれど、しか
をし見れば、花
思もなし。物
(古今集、藤原
良房)

(二) 新古今集。康
資王の母の
歌。

花は必要である。これは寧ろ花を貴んで其の濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺は、其の皎潔を愛し、其の清淨を貴ぶが、花は其の艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、みな花に基づいたものである。古今東西の詩歌は、^(一) 挙げるだけ愚である。余はたゞ「花をし見れば物思もなし」といふ古歌を以て總べてを總括し得べしと信ずる。

月雪花三つのながめは、各其の特長がある。いづれを前、いづれを後といふことが出来ぬ。

山櫻花の下風吹きにけり

木のもとごとの雪のむらぎえ

(一) 古今集、清原
深養父の歌。

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し吳山の雪、鞋はかばし楚地の花、肩上の笠には

無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花にとたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪を賞でぬ人も無い。

思へ、世界の一部分には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてある極北の國では、氷は即ち人の家である。此の地方の人には寸紅の目を楽しましめるものも無い。又之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生

(二) 謡曲「葛城」の
句。

瓊玉を綴る
不夜城

一伊藤仁齋の
歌。

二唐の劉廷芝が
「代悲白頭翁」の詩中の
句。

息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇観は見たことが無い。瓦斯、電燈の光に不夜城の観を呈して、夜更を知らぬ繁華を倫敦の住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人が、昔も今も此の三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は、古人の歴史が加つて一層の感興が増す。世世を経てながめし人の數にまた、我をもゆるせ秋の夜の月。月は古來の歴史を照す鏡である。年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。入生の感は花を見て益、繁く、雪を見て愈、多い。二千五百年以來、月雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

白讀文

一書齋

井上哲次郎

書齋は出來得べきだけ清淨にし、且之を神聖に保たなければなりません。朝に夕に、或は書き或は讀むことを爲す所であり、書冊、筆墨の類の縦横散亂することは免れないのでありますが、出來得べきだけ筆墨、紙冊等悉く其の處を得て能く整頓するやうに努め、亂雜を誠むべきことであります。殊に有形無形の不淨を避けることが必要であります。それといふのは、書齋は書齋の主人公に取つては、其の頭腦ちうなうの次であります。否むしる書齋は頭腦の反射であります。書齋の状態如何は、其の主人公の精神状態の如何を現して居るものであります。書齋を亂雜らんざならしめて一向平氣で居るといふやうなことになるば、やはり其の人の精神状態がさういふ有様であるので

縦横散亂
ばらばらに
其の處を得る
そのつてある。
不淨
きたない物。
反射
光が物に中つ
て、照りかへ
すこと。頭腦
の反射とは、
其の人の知識
の表示といふ
意。
雜草が生ひ茂
つてゐるやう
に取りちらし
てゐること。
亂雜と同じ。

批評的觀念
物の是非を分
つ考。

あります。精神状態が亂雜複雑に堪へることが出來ず、悉く正確に、悉く純潔ならしめようといふ、穎敏な批評的觀念を以て満されて居りますれば、其の書齋の状態も之に相應するやうになつて來るといふのは、必然の結果であります。又其の書齋の中に如何なる書類が陳列してあるか、其の愛讀して居る書類は如何なる性質のものであるか、高尚であるか野卑であるか。若し極めて野卑な小説及び其の他蕪雜な雜書類であれば、やはり其の主人公の嗜好が極めて野卑であり、蕪雜であることを現して居る。若し又其の書類が哲學、宗教、文學、科學など高尚な方面のものでありますれば、其の主人公がさういふ嗜好を有つて居るに相違ありません。それで書齋の中の有様によつて、主人公の性質が分る譯であります。書齋の有様は主人公の精神の反射であります。それですから、主人公の頭腦の中即ち精神が純潔でなければならぬやうに、書齋も亦純潔でなければなりません。純潔で且整頓された書齋の中に於てのみ、眞に趣味あり、秩序ある讀書はなし得られるのであります。書齋の中には平生最も愛讀する書類、及び書類講讀に缺くべからざる字書類の

座右
手近。

世故
世の中のいろ
いろの事。
達觀
物事の先の先
まで、ひろく
見通す。

自我
自分。

如きも、座右に備へて置かなければならぬのであります。又古今と云はず、東西と云はず、其の最も敬慕して居る偉人、傑士もしくは聖人の肖像又は筆蹟等を壁間に掛けて、朝に夕に親しく之に接すると云ふことも、なか／＼趣味あるものであります。また年の若いうちには、書畫に就いて、さ程の趣味を生ずるものではありませんが、漸く經驗を積み、世故に訓練し、人事を達觀した後、古人の書畫を壁間に掛けて之を眺める時は、一種いふべからざる趣味を生ずるものであります。若し又廣大な書齋でありますれば、世界の地圖もしくは日本の地圖等を掛けるのも甚だ有益であります。かくの如く多く書籍を集め、又書籍を清潔にし、古人の肖像筆蹟等を掲げて裝飾した以上は、愈、以て其の主人公の頭腦を象る譯であつて、自我と書齋とは決して離るべからざる關係を生じて來るのであります。

二 吉野の花だより

坪谷 水哉

今年もまた吉野山に參り候。口の千本は最早葉櫻となり、吉野宮の邊まで

(一)大和國吉野山中藏王堂の東に當る。木正行の遺蹟。勸願寺。
 (二)今來古往跡茫茫。石馬無聲。塚土荒。春入。櫻。花。滿。山。白。南朝天子御魂香。(梁川星巖、遊三芳野詩)
 芳雲彩霞。櫻の形容。落英。落花。
 (三)足利尊氏の老臣。正平六年殺さる。
 (四)都だにさびしかりしを。吉野の奥のさみだれの頃。(後醍醐天皇)

(五)米國の文豪ホーソン小品集中の一章を譯す。
 六明治の文學者。外國文學の紹

散りかゝり候へども、中の千本は今が眞盛にて、如意輪堂は櫻雲のうちに罩められ、後醍醐天皇の山陵も、正に南朝天子御魂香の句の通りに候、數日前東郷大將來られ候由にて、小生只今御陵に參拜する時にも、某陸軍將官の家族と共に如意輪寺を出でらるゝを見受け候、匆々。(第一信)

蝶の羽風にも散出しさうに咲満ちたる中の千本の櫻も、昨夜狂風一過して、今朝は最早芳雲彩霞も色を失ひ、小兒等が地上に狼藉たる落英を拾うて空中に撒けば、時ならぬ吹雪となり、繽紛繚亂と飛ぶ光景を見ては、彼の高師直等が、北朝の命を奉じて此處の行宮を襲ひ、後村上天皇の賀名生へ遷幸し給ひし跡に火を放ち、宮殿樓臺を焦土と爲したる當時の有様も思ひ出され、哀さ限りなく候。花時尙然り、況して都だに淋しかりしを、と咏せさせ給へる吉野の奥の五月雨の頃を想像仕候ては、泣出し度候偶、細雨來る。(第二信)

三運命

森田思軒

世の中の出來事、來りて我等の運命を左右するもの、其の數、日に百千な

介者として知られた。

David.

Boston, 米國東海岸の大都會

るのみならず、然れども我等がこれを認め得るは、只其の表面に現れ、實際に結果を生ずる一半のみ、其の來らんとして來らず、殆ど己の上に附着せんとして遂に附着せず、其のまゝに消えゆく出來事は、また實に夥しからん。もし我等が暗々裏にこれらの出來事を認め得んには、我等の生涯の望と畏とは、まことに無限無邊ならん。Davidの事以て見るべきなり。

我等はDavidの既往を知らず、また知るを要せず。彼の履歴は小學校及び中學校にて、ひとほりの教育を受けたるといふのみにて事足るべし。我等は今只二十歳の少年が、始めて故郷の田舎を離れ、ボストン府にゆきて、商家の手代とならんとする途上にある彼を見るのみ。田舎少年の心安さは、車も借らず、馬も借らず、日出より歩き出して、既に日中に至れり。時はこれ夏のなかば、漸く覺ゆる疲勞と、益加る暑熱とは、彼をしてかたへなる樹蔭に休息し、乗合馬車の來るを待ちて、これに投せんと決意せしめたり。

鬱葱たる幾株の喬木、丘の上に立並び、ほとりにはまた清らかなる泉の水の涌出づるあり。たとひDavidならずとも、往來の人誰か此の日中に此

恍惚
うつとりとす
る。うまい
うまい
熱睡。

點々
ほつりく。

寓目
目につく。
稱羨
ほめうらや
む。
一讀一譏
或はほめ或は
そしる。

隣々
ごろく。

低語
さやく。
容與
やすらか。

の樹蔭に遇ひて、一度憩ふことをおもはざらん。ダヴィッドは先づ泉の水に
渴きたる喉を潤し、徐に負ひたる包を解きおろして、其の上に粗末なる木綿
の手拭を重ねかけ、これを枕として仰臥せり。太陽の光はうちかさなれる枝
に遮られて、ダヴィッドの身に到らず。往來の路は昨日の大雨に潤ひたれば、
少しも塵を飛ばさず。生ひ茂れる緑の草は絶好なる蓐よりも快く柔なり。泉の
水は沸々として常に耳邊に鳴り、縦横せる枝はそよ吹く風の爲にをりく
微揺す。ダヴィッドは忽ち心陶然として恍惚たるうちに、身はいつかうまい
の裏に落ちぬ。

ダヴィッドは樹蔭に眠り居たるが、途上には或は馬に跨がり、或は車に乗
り、又或は歩みてダヴィッドの前を來往するもの點々たり。或者はわき目も
ふらず過行けば、彼の此處にあることを知らざるなり。或者は偶、彼のこゝに
横たはれるに寓目すれども、おのが心の忙しき思念に蔽はれて、別に心も留
めず過行くなり。又は彼の無邪氣に眠れるを見て、笑ひつゝ去るもあり。又は
其の道傍に眠れるを卑しみて、眉顰めつゝ往くもあり。非難稱羨、一讀一譏、す
べてダヴィッドの一身に集れり。

やがて一輛のはでやかなる輕車の、毛色うるはしき二頭の馬を塵ぎ、隣々
として馳來れるが、此の木立の前に至りて、突然とどまりたり。そは一本の轆
弛みて、一箇の輪にくるひを生じたればなり。車中にありたるは商人夫妻に
て、齡高く品よき人なり。老夫妻は從者が輪を繕ふ間憩はんとて、樹蔭に立寄
りたるが、其の下にダヴィッドの横たはれるを見るより、俄に驚きて二三歩
あとにさがりたり。ためつすがめつしばし凝視し居たりしが、やがて心を安
んじたりけん、此のうまいせる少年を驚かさざるやう忍足して、再び樹蔭に
立寄りて、夫は妻に低語せり。あの心よげに眠れるさまを見よ。あの呼吸する
氣息の極めて容與たるを見よ。これ健康にして心やすらかなるものならで
は能はざるなり。もし余をしてかゝるうまいを得しめば、余は余が歳入の半
ばを割くとも惜しからじ。と、妻は今風の爲に一方の枝の推しやられ、一條の
太陽の光少年の面に漏れそゞくを見て、自ら手を伸べ、纏れたる枝を解き、こ
れを蔽ひやりながら、また夫に低語せり。天は此の少年を我等に與へ給ふと

Henry.

見ゆるなり我等が従弟の子の所行に失望せる後偶然此の樹蔭に立寄りて、此の少年に邂逅したるは、まことに不思議ならずや。且熟視すれば、何となく面ざし逝きしヘンリーに肖たるやうなり。試に彼を喚醒さんか。夫はうち案じて、そは何の爲ぞ。我等はまだ少年の素性をも知らずして、いへば、妻も稍惑ひながら、尙も思ひ入りて、さりながら彼の無邪氣なる容貌彼の無心に眠れる姿よ。といひぬ。

今や一箇の莫大なる福はダヴィッドの上に臨めり。此の老夫妻はたゞ一人の子ヘンリーを先立たせ、家に蓄へたる巨萬の富を相續せさすべき者もなく、せめては遠き従弟の子にと目ざして、これを尋ねしに、其の子は所行不良にして心に適はず、今失望してポストン府に歸るなりけり。人はかゝる時に當りて、さまざまの想像をも畫がくものなり。妻は再び反復せり、試に喚醒さんか。と同時に背後に従者の聲あり、修繕整ひて候。

忽焉
にはかに。
駒々然
ぐう々然
きをかくいび

老夫妻は此の聲に忽焉として我に復り、相携へて車上に身を置けり。ダヴィッドはなほ駒々然たり。

贓物
ぬすみもの。

老夫妻を載せたる輕車は去りてまだ一里は行かざるべしと思ふ時、また二人の人ありて此の樹蔭に立寄りたり。木綿の頭巾を目深にかぶりたれば、審に見るべからざれども、顔の色いたく黒くして、衣服粗野に、且こゝかしこに幾多の汚點さへ印してあり。こはこれ此の邊に徘徊する山賊にして、今其の贓物を分たんとて、此の樹蔭に来れるなり。かくてダヴィッドの横たはれるを見るより、一人は早くも他の一人に、汝はあの枕にせる包を見すや。と囁けば、されど若し目を覺したらば、といふを、一人は急に懷中を探りて、匕首の柄を少し露して、これのみ。といふ。やがて二人はダヴィッドのほとりに進み寄り、一人は其の匕首を抜きて胸に擬し、一人は頭の方にまはりて、其の枕とせる包を抽かんとす。此の二人の顔、若しダヴィッドをして目を開きて見しめば、直ちに以て悪魔とやなさん。此の時忽ち一頭の黄犬あり、鼻をうごめかして頻りに地を嗅ぎつゝ、こゝに走來れり。一人の賊は目早く之を見つけていへり。やめよ、やめよ。かの犬の主人次いでこゝに來るならん。と。

一人は匕首を懷中に藏めたり。一人はブランドー一壘を取出せり。仕事の

將に成らんとして敗れたるを笑ひのゝしり、互に幾口かを飲むうちに、各黒き顔に一種の紅を潮し來れり。後にはダヴィッドの事をば忘れて、がやがやとうち興じつゝ、相携へてまた出でゆけり。しかもダヴィッドはなほ駒々然たり。

一時間の眠はダヴィッドの疲勞を醫し盡せり。ダヴィッドはすこし身動せり。徐に其の唇を搖がせり。聲はなけれど口の中にひとり半殘の夢を語り。をちかたに起る輪聲、既にして殷々、既にして轟々、益々、近くして益々高く、今や輾轉として尺寸の間に來れり。これ一輛の乗合馬車なり。ダヴィッドは俄に躍り起てり。こや御者。こゝに旅客あり。上層に席あり。ダヴィッドは馬車の上層に登り坐せり。ダヴィッドは前途幾多の望をかけたる樂しきボストン府に馳せゆけり。かの清泉には一顧眄の別れをだになさずして。

一度は富の神の來りて、黄金の光其の水面に照射せることもありしを、ダヴィッドは知らざるなり。又一度は死の神の來りて、其の水上に血を染めんとせることもありしを、ダヴィッドは知らざるなり。嗚呼彼は生涯遂にこれを知らざるなり。

一顧眄
一目ふりかへ
つて見る。

を知らざるなり。

四 ハンニバル

矢野龍溪

(1) Hannibal, 古代北弗利加の都市カルタゴの英雄。ローマと争ひ敗れて死す。(西曆紀元前二四七—一八三)
(2) Hannibal (Tamilcar), 人生室家の樂み家庭生活のたのしみ。

英雄の成敗には千古傷心のこと少からず。雖も東西古今を通じて、ハンニバルの事の如く悲しきはあらざるなり。幼齡九歳の彼が、其の父(1)に伴はれて神の卓前に立ち、國讐なるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより、其の終焉に至るまで、一念常に國讐を報ずるに非ざるものなし。彼は二十七歳、人生の花とも稱すべき時、大兵を帥ゐて敵國に侵入せしより以來十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂みを享けたる跡なし。大功成るに垂んとして果さず、ローマに窮追せられて、諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を仰いで斃る。嗚呼人生の慘なる、復此の人の如きを見ざるなり。

若し彼をして尋常人ならしめば、亦深く悲しむに足るものなし。然れども其の用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に、政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家に非ず、文ありて武

對峙
はり合ふ。
〔Carthago.〕

なき文弱人に非ず。人格上一點の非議すべき所なく、而して其の末路かくの如し。是特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。
地中海を隔て、南北に對峙するものはローマ、カルタゴの二共和國なり。天は両雄邦の並立を許さず、彼滅びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛ならず。ロー人は戰鬪を事とする尙武の民なり、カ人は貿易を主とする平和の民なり。カ人をして兵と戰はしむるは、羊を驅つて狼に向はしむるが如し。況やハンニバルの事に當りしは、既に其の國が一たび痛撃を受けたる後なるをや。本國人の頼むに足



ルバニハ

らざるを知り、乃父の遺志を繼いで兵を屬領に募り、之を以て強敵に當らんとす。事固より既に非なり、彼豈之を知らざらんや。知つて而して是に出づる、亦實に勢の已むを得ざるものあればなり。

〔Pyrenæes.〕
佛國と西班牙
國境の山脈。
見兵
現在の手勢。

〔Gaul.〕

烏合
よりあつま
り。

彼が志を決して西班牙を發するに臨み、其の兵幾ど十萬と號す。然れども、ピレネーの峻嶺を越え、アルプの難路を過終へしとき、其の兵已に四分の一に減す。彼がローマの北野に進みし時は、見兵僅かに二萬五千に過ぎざるなり。其の途上に於て兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令して曰く、去らんと欲するものは去れ。従ふことを樂しむものは來れ。此の時に當りて、將軍を棄てんとするもの數千人なりきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり。而して其の兵は西班牙及びゴール北部諸種の蠻族より組成せるもののみ。決して夫の愛國心燃ゆるが如きロー兵の比にあらざるなり。蕪雜烏合の此の兵に對して、恩威の大なるものあるにあらざるよりは、いづくんぞよくかくの如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、其の兵士は多く統一せる國民にして、愛國心あるものにあらざるはなし。唯それハンニバルに至つては即ち然らず。其の將士は其の將軍に對して、單に恩威を感ずるのみ。實に愛國の要素を缺けり。此の異様の兵を以て彼の將來印度以西を統一すべき運命を擔へる勇壯絶倫、愛國無雙のローマ人に敵對

し、一たびは幾ぞ之を壓服せんとしたるなり、嗚呼、此の人の外、千古復此の人あらんや。

獨り人品のみならず、其の戦闘に長すること亦古今無雙なり。^(一)アレキサン

デル、^(二)ブレデリック、^(三)ナポレオンと雖も、其の上に出づるを得ず。是余の私評に

非ず、歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と強弱勇怯、既に懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして我は毎に寡兵なり。然るに猶奇戦には謀略を用ひ、正

戦には戦術を用ふ。有名なるカンネの^(四)大戦を見よ。彼の兵數は敵軍の半ばに

も當らざりしに非ずや。しかも堂堂たる正戦に於て、彼は巧妙なる戦術を用

ひ、敵軍をして七萬の死屍を戦地に遺して潰敗せしめたり。此の如き全勝は、

歴史上實に稀有の事なりとす。戦地に斃れたるローマ貴族の指より集めた

る金の指環數解を、彼の使が本國に齎し歸りて之を國會に示せる時、其の國

人の驚喜は幾何なりしぞ。此の大勝に乗じて直ちにローマを衝かざりしは、

後人の憾む所なりと雖も、其の兵やも甚だ多からず、加ふるに戦後の疲憊

を以てす。此の危道を行かすとも、一方にて伊太利南部の城邑は皆遙に歎を

1) Alexander: 王。西曆紀元前三五六一三
2) Frederick: 普魯西王。西曆一七七一(一七八六)
3) Napoleon: 佛蘭西皇帝。西曆一七六九(一八一八)
4) Cannae: 古代伊太利アブリア州の首府。前二〇六年ハンニバルは四萬の兵を以て八萬餘のローマ軍を此地に破つた。
懸絶 かけはなれてある。
歎を送る よしみを通ずる。

送る勢あり、彼を捨て此を取る、亦理なしとせんや。此の戦の夕、一部將が「我に三千の騎兵を與へよ。將軍の爲に直ちにローマを衝き、二日を出でずして將軍をローマの城中に晩食せしめん」と獻策せし時、彼既に其の得失を知る、必ずしも後人の非議を俟たざるなり。

金穀 軍用金と兵糧。

彼の國人は必要大切の場合にも、曾て十分の援兵を彼に送りしことなく、十分の金穀を彼に與へしことなし。是彼が十六年間敵國を蹂躪しながら、遂に其の成功を最後に誤りし大原因なり。實に本國人民の罪にして、彼の罪にあらず。斯の如くにして彼は十六年間自ら兵を他國に募りて其の缺を補へるのみならず、其の金穀も常に之を敵國に取れり。其の忍耐の大なる、亦其の智略と並行すと謂ふべし。

彼は善く戦へり。彼は巧に外交を操縦せり。然れども其の本國は却つて敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふべからざるに及んで、彼を召喚して之に當らしむ。嗚呼亦遅し。彼の智勇も之を如何ともする能はず。しかも猶此の存亡の秋に在つて、敵と講和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐

小康 少しの間の平和。
釐 釐と、のへあらためる。

涵養 やしなふ。
國幣 國庫。
武士 武士。

(1) Hasdrubal.
(一) 西曆紀元
前二〇七

(二) 唐の詩人杜甫の句。
(三) 陝西省鳳翔縣の地名。諸葛亮の本營のありし處。
(四) 諸葛亮。字は孔明。蜀漢の忠臣。
鯨文 いれずみ。
(五) 今の浙江省杭州府。

革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國幣の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武弁ならんや。彼をして平時に出でしめば、必ずや治平の良宰相たらん。

其の未だ本國に召喚せられずして、ローマの野に轉戦するや、兵寡く、食竭く。恢復の望は、單に懸りて其の實弟ハスドルバルが西班牙より援軍を率ゐて來り合するにありしなり。然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟は伊太利の北野に破られ、彼が手を握りて久別の喜を叙せんと樂しみたる其の人の首級は、敵の槍鋒に貫かれて、遙に我が營前に現れたり。嗚呼人生悲惨のこと多しと雖も、未だ此の人の此の時の如きはあらざるなり。

彼が遙に弟の首級を望みけるとき、我今カルタゴの運命を知れり。と歎せし一言は、如何に無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よりするもなほ忍ぶ能はず、況や自國の興亡は此の援軍の勝敗に懸れるをや。史を讀んでこゝに至り、卷を掩うて長歎せざる者果して幾人かある。出師未捷身先死の五丈原頭(四)の武侯や、盡忠報國の鯨文(五)を露して餘杭の市に斬られたる岳武穆(六)も、亦何ぞ比するに足らん。

彼の戰略戰術が人目を眩耀するが爲に、人或は其の名將たるを知つて、其の人格を察せず。若し能く之を究めば、其の不幸を悲しむ情、轉、深きを加へん。千古傷心の事實に此の人の一生の如きはあらざるなり。——出鱈目の記——

五 寺と橋

大庭 景 秋

風景觀上歐羅巴に比べて、亞細亞の風物に三つの優れたものがある。寺と橋と湖である。

亞細亞流に考へると、旅行の對象には是非とも寺と橋とが欲しい。此の二つが、日本や、支那や、朝鮮に於て如何に景趣を作り、如何に風致をいかすかは、恐らく西洋人の想像の及ばぬ所であらう。

歐米に互つて第一等のお寺と云へば、何と云つても羅馬のサン・ピエトロ(一)大寺院であらう。赤花崗岩の百三十二呎の尖塔、百九十八呎の奥行ある本堂、華麗宏大の點に於て、世界に冠たる巨利には相違ないが、只是建築學上の偉

(1) San Pietro.
西曆一五〇六年
年法王ユリウス
ス二世の創
建。一六二六
年に至つて完
成した。
巨利
大寺院。

(六) 岳飛。宋の忠臣。

對象
めあて。

(1) Statesman's Gallery 功勞ありし政治家の靈を祀る。
 (2) Poets Corner 有名なる詩人の像をかがく。
 (3) 紀伊伊都郡。眞言宗の靈場。
 (4) 近江滋賀郡。天台宗の靈場。
 (5) 京都市の東部に在り。浄土宗の本山。
 (6) 支那江蘇省蘇州府の附近に在り。張繼の詩「橋夜泊」の詩に「一月落烏啼霜滿天。江風漁火對秋眠。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。」
 (7) Tower Bridge. テームス河上、倫敦塔に對して架けた釣橋。
 (8) Zometano.

觀であつて、風景觀からは鑑一文の値もない。寧ろ羅馬を俗惡にするものである。英人の誇であるウェストミンスター・アベールは内外共に黒ずんでゐて、前者に比すれば餘程抹香臭い點はあるが、此の寺院から、いはゆる政治家廊下と詩人小路とを取除けたなら、觀光客のために果して幾何の價値をのこすであらうか。これから見れば、我が高野山や、比叡山は言ふに及ばず、一智恩院を以てしても、寺院そのものが直ちに景趣をなしてをる。支那のお寺は多少詩文の上で誇張されて居る嫌はあるが、有名な姑蘇城外の寒山寺にしては、平地にある見すばらしい俗寺に過ぎぬ。只支那と朝鮮の寺は、荒廢のまゝ、幾百年の雨打風敲に委せられた爲に、大伽藍にしても、山寺にしても、却つて四邊の風致を害するまでに立至つた。それを思へば、日本の佛閣特に古刹は、單に風景觀から見ても、大切に保存すべきものである。

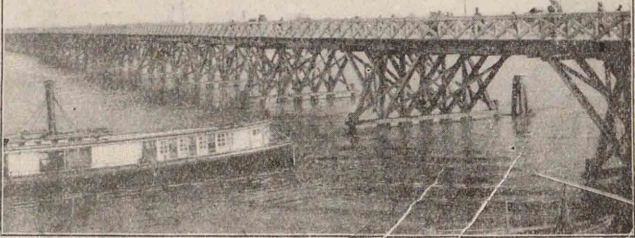
橋も亦寺と同様である。巴里の七大橋は美ならざるに非ず、只風致があるか無いか問題である。倫敦のタワーブリッジにしても、一向に感心が出來ぬ。そこへ行くときさすがに羅馬だ、ノメンタノの廢橋一つで澤山である。史蹟

(1) Campagna. ローマ市南方の曠野。

(2) 周防國岩國町錦川に架す。延長百二十五間高さ十三間に及ぶ。

(3) Yakutsk. シベリアの東部。

岩國町錦帶橋と(上圖)新潟市萬代橋(信濃川に架す)



と畫趣と野情とを兼備へてをる。カムバニヤの曠野に千年の青苔に包まれて靜に重々しく懸つてをる此の古橋は、楓橋夜泊の詩で有名な楓橋をちよつと想ひ出させる。日本ではとかく忘れられてをるが、周防の錦帶橋は世界的名物の一つとしてよい。慶應三年に巴里の大博覽會に此の橋の模型を出品したのは、幕府に尙人物があつた事を證據立てるに足ると思ふ。露西亞ではシベリヤのヤクーツク州に三百五十年許を経た木造家屋が特に保存されて、珍とされてをるが、巨材大石を聯ねて半空に懸けた錦帶橋は、天下の珍であら

ねばならぬ。其の他風景観から見ると、我が國固有の橋が如何に風景上重要な位置に居るか分る。若しあの畫の様な吐月橋がなかつたなら、嵐山の風光は其の半ばを殺がれるであらう。宇治には宇治橋があればこそ、鳳凰堂も扇の芝も皆活きる。阿波の祖谷(五)の蘿橋(六)は山中の奇橋として暫く言はず。市として橋梁に富むは大阪であるが、私は橋の大阪よりも、橋の新潟が好きである。誰やらの詩に「柳濠七十二橋頭」とあるが、渠毎に橋を架した今日では、殆ど二百橋を算へるであらう。江戸時代の両國橋、浪華の天神橋も時代の要求で西洋式の鐵橋になつたのは致方もないが、市中の橋にしても、交通上差支ない場所には、和風を保存したいものである。

—世界を家として—

(一) 京都の西。
 (二) 京都の南。
 (三) 宇治平等院。
 (四) 平等院の境内。
 (五) 阿波國美馬郡。祖谷川に架す。

改訂帝國讀本卷五終

通用字及び正字對照表

(註に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。)

兩	仍	佞	免	兔	冎	冒	決	况	準	涼	減	凡	函	及	兩	仍	佞	免	兔	冎	冒	決	况	準	涼	減	凡	函	及	通用正			
剪	劔	効	勺	卑	卽	厨	厨	厨	雙	収	叙	唇	器	噴	同	剪	劔	効	勺	卑	卽	厨	厨	厨	雙	収	叙	唇	器	噴	同	通用正	
場	塚	牆	冤	寇	寶	尅	帽	幘	幘	幘	廩	廩	往	恒	懣	場	塚	牆	冤	寇	寶	尅	帽	幘	幘	幘	廩	廩	往	恒	懣	通用正	
戟	戲	拘	擧	拔	挿	捏	携	携	携	携	既	昂	晉	央	枵	戟	戲	拘	擧	拔	挿	捏	携	携	携	既	昂	晉	央	枵	通用正		
楫	欸	殲	殺	毒	冰	涅	濁	潛	潛	焔	熔	猿	猪	猫	猷	楫	欸	殲	殺	毒	冰	涅	濁	潛	潛	焔	熔	猿	猪	猫	猷	通用正	
獵	玄	瑣	畫	畧	畧	癡	鼓	盃	盃	盃	盜	砲	碍	稟	穎	獵	玄	瑣	畫	畧	畧	癡	鼓	盃	盃	盃	盜	砲	碍	稟	穎	通用正	
頤	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	頤	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	竊	通用正
纏	罰	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	纏	罰	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	羣	通用正
臥	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	臥	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	致	通用正
裡	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	裡	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	褒	通用正
賓	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	賓	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	贊	通用正
間	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	間	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	隔	通用正
閑	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	閑	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	隙	通用正

同字表 (もいづれにて)

附録

柿	案	基	棕	楫	稿	概	朴
柀	柀	柀	柀	柀	柀	柀	柀
毘	汙	温	烟	无	无	无	无
砧	稿	競	筍	筍	筍	筍	筍
碓	橐	縹	縹	縹	縹	縹	縹
網	縹	縹	縹	縹	縹	縹	縹
網	縹	縹	縹	縹	縹	縹	縹
荒	荒	荒	荒	荒	荒	荒	荒
荒	荒	荒	荒	荒	荒	荒	荒
遁	銜	銜	銜	銜	銜	銜	銜
躡	躡	躡	躡	躡	躡	躡	躡
躡	躡	躡	躡	躡	躡	躡	躡

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中
* 標ヲ附シタル文字ニ限り、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

巨 互
ワタル。「連互」
桓ニ同シ。
笨ニ同シ。アラシ、麗、粗。
カラダ。

壺 壺 姫 姫 託 託 擔 担 改 改 槍 槍 欠 欠 糸 糸 絲 絲

ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。
ツ、シム。
ヒメ。
拓ニ同シ。オス、ヒラケ。
ヨル、タノム、ユグヌ、カコツク。
ハラフ。又アゲ。
ニナフ、カツク。
鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
アラタム。
ヤリ。
鏑ニ同シ。鏑ノ聲ノ形容。
アケビ。「欠伸」
カク。「缺席」
ホソイト、細絲。
イト。

但 但 借 借 胃 胃 協 協 刺 刺 台 台 后 后 商 商

タマシ、タマ。「但馬」
ツタナシ、拙劣。
ミダリガハシ、猥。
身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
カブト、兜。「甲冑」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」
カナフ、叶。
オビヤカス、脅。
サス。「刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
ウテナ、ダイ。
ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
キミ。「皇后」
アキナヒ。
モト、本。

羨 羨 蟲 虫 詔 詔 詔 詔 證 證 豐 豐 迄 迄 選 選 撰 撰

支那ノ地名。
ウラヤム。
魚介類ノ總稱。又マムシ。
シム。
ワビ、ワブ。「詔狀」
詔ニ同シ。アザムク。
ヘツラフ。
ウタガフ、疑。
アカシ、シルシ。「證明」
イサム、諫。
禮ノ古字。
ユタカ。
マデ。
ユク、行。
エラブ。(ヨリトル)
エラブ。(書物ヲ編纂ス)

卻シキ 卻シキ 鍛カ 鍛カ

宛 字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
 かひ(詮の意
の場合) 甲斐
 きつと 屹度
 さすが 流石、道
 しまふ 仕舞ふ
 だけ 丈
 だめ 駄目
 ちやうど 丁度
 ちよつと 一寸、鳥渡
 でたらめ 出鱈目

とうく 到頭
 とかく 兎角、左右
 とて、とても 迎
 とにかく 兎に角
 なかく 中々、却々
 ふるまひ 振舞
 はかなし 果敢なし
 ほんたう 本當
 むだ 無駄
 むづかし 六ケし
 やたら 矢鱈
 やはり 矢張り

附 録 終

大大大大大
正正正正正

大正六年十一月五日 訂正再版發行
 大正七年二月八日 訂正再版發行
 大正七年五月二日 訂正再版發行
 大正七年十月一日 訂正再版發行
 大正七年十二月十三日 訂正再版發行



改訂帝國讀本

價	定
卷一、二各金參拾八錢	卷一、二各金參拾八錢
卷三、四各金參拾六錢	卷三、四各金參拾六錢
至白卷十五各金參拾錢	至白卷十五各金參拾錢

著 者 芳 賀 矢 一

發 行 者 兼 會 社 富 山 房

代 表 者 合 資 會 社 富 山 房 社 長 坂 本 嘉 治 馬

印 刷 所 合 資 會 社 電 新 堂

發 行 所

東 京 市 神 田 區 裏 神 保 町 九 番 地

富 山 房

長 電 話 本 局 一 〇 三 六 本 局 四 一 三 〇 番 振 替 口 座 東 京 〇 五 一 番

